



Captains of Industry～知と業(わざ)のフロンティア

対談

グローバル時代の一橋大学 ～現場からの提言～

理事・副学長(研究、国際交流、社会連携担当) 村田光二

経済学研究科教授・役員補佐(研究、国際交流担当) 古澤泰治

Innovation

《文化資源としての一橋大学》

一橋大学の肖像画

一言語社会研究科教員の独白

文化資源としての一橋大学

言語社会研究科准教授 小泉順也

Innovation

ユニークな競争戦略を実践している

日本の企業・事業を表彰する

ポーター賞

連載企画

Project Report

平成28年度春季公開講座

「憲法のいま」

Project Report

英語で日本を研究する。

社会学部・社会学研究科主催の

英語によるレクチャーシリーズが始まりました

時代の論点

一橋大学附属図書館ブックトーク

『ヨーロッパ 時空の交差点』

―場所に学ぶ、書物に学ぶ、その作法―

経済学研究科教授 大月康弘

Global Report

「日本語の壁」を取り払い、

外国人留学生に学びやすい環境を提供

グローバル化推進の原動力となるプログラム“HGP”

Bridges

観光客誘致を目的とした「米子プロジェクト」

グローバルな視点でローカルの観光戦略を変える

渋沢スカラープログラム(SSP) 受講生が

鳥取県米子市に持続的発展プランを提言

連載企画

People

リオデジャネイロオリンピック

ダブルスカル男子軽量級 日本代表選手

中野紘志氏

対談

一橋の女性たち

株式会社大塚家具 代表取締役社長

大塚久美子氏

商学研究科准教授 山下裕子

巻頭特集

グローバル時代の一橋大学
（現場からの提言）

【対談】

理事・副学長（研究、国際交流、社会連携担当）／村田光二
経済学研究科教授・役員補佐（研究、国際交流担当）／古澤泰治

1

連載企画

Innovation

《文化資源としての一橋大学》

一橋大学の肖像画

――言語社会研究科教員の独白

文化資源としての一橋大学

言語社会研究科准教授／小泉順也

一橋大学には、国内屈指の肖像画コレクションが眠る

ユニークな競争戦略を実践している

日本の企業・事業を表彰する《ポーター賞》

国際企業戦略研究科教授／大藪恵美

ポーター賞を受賞したことで、上場する必要がなくなりました

株式会社中川政七商店 代表取締役社長 十三代／中川 淳氏

連載企画

Project Report

平成28年度春季公開講座「憲法のいま」

英語で日本を研究する。

社会学部・社会学研究科主催の

英語によるレクチャーシリーズが始まりました

研究室訪問 chat in the den

経済学研究科講師／山田俊皓

社会学研究科教授／大瀧友里奈

連載企画

時代◆論点

一橋大学附属図書館ブックトーク

『ヨーロッパ 時空の交差点』

――場所に学ぶ、書物に学ぶ、その作法――

経済学研究科教授／大月康弘

連載企画

Global Report

「日本語の壁」を取り払い、外国人留学生に学びやすい環境を提供
グローバル化推進の原動力となるプログラム、HGP

34

連載企画

Bridges

《Report》商学部 観光客誘致を目的とした「米子プロジェクト」

グローバルな視点でローカルの観光戦略を変える

渋沢スカイプログラム(SSP)受講生が

鳥取県米子市に持続的発展プランを提言

Key Person's Voice

株式会社吹野コンサルティング 代表取締役社長

株式会社NGR取締役副会長

株式会社オレガ取締役会長／吹野博志氏

Student's Voice

商学部3年（SSP第2期受講生）／小澤海人さん

連載企画

People

リオデジャネイロオリンピック

ダブルスカル男子軽量級 日本代表選手／中野紘志氏

連載企画

一橋の女性たち

【対談】

株式会社大塚家具 代表取締役社長／大塚久美子氏

商学研究科准教授／山下裕子

Love of Culture

演劇の魅力 商学研究科教授／江川雅子

Book Review

桜庭一樹『少女七竈と七人の可愛そうな大人』（角川書店、2006年）

経済研究所教授／森口千晶

Campus Information

◆一橋大学基金Topic

一橋大学基金は、グローバル人材育成事業を支援しています

◆一橋大学基金ご寄付者のご芳名

◆平成28年度一橋大学附属図書館企画展示のお知らせ

◆2016オープンキャンパスを開催しました

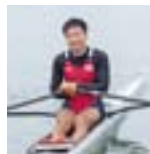
◆一橋大学兼松講堂レジデントオーケストラ

◆国立シンフォニカー第13回定期演奏会開催のお知らせ

48



42



38



34



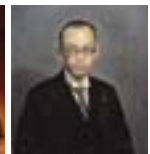
20



16



8



1



58

57

56

55

54

53

52

48

42

41

40 38

グローバル時代の 一橋大学 （現場からの提言）

グローバル人材の育成に力を注いでいる一橋大学。

さまざまな「グローバルリーダー育成プログラム」が運営されているほか、

海外の大学と相互に学生を派遣し合う「学生交流協定数」は73に達している（2016年度）。

こうした施策づくりを主導する国際交流担当の理事・副学長である村田光二社会学研究科教授と、

文字どおり世界を飛び回って海外の大学とのネットワークキングに励んでいる古澤泰治経済学研究科教授が、

一橋大学におけるグローバル人材教育の現状と課題、そして意義を語り合った。



グローバル時代の一橋大学
「現場からの提言」

月1、2回の

海外出張

村田 私は国際交流担当の理事・副学長として、一橋大学の国際化、グローバル化の課題に取り組んでいます。国際交流担当の役員補佐として、その仕事を強力にバックアップしてくださっているのが古澤先生です。本日は、一橋大学の国際交流の現状と将来について、学生交流協定締結に関わる古澤先生の取り組みについても振り返りながら、語り合いたいと思います。特に、一橋大学の学生たちが海外に目を向け、グローバル社会で活躍したいと思ってもらえるようなお話ができると思います。では、どうぞよろしくお話しします。

古澤 こちらこそ、よろしくお話しします。

村田 私が担当している研究と社会連携の職務については、何とかそれ以前の経験をもとに自分なりにやってこられたと思います。しかし、国際交流については、個人的にも研究者としても比較的経験が乏しく、古澤先生のサポートがなければとても困難な職務だったと思います。古澤先生の国際交流に関わる取り組みをいつも頼もしく感じています。いつ頃から海外への関心をお持ちだったのでしょうか？

古澤 海外への関心が特に強かったわけではありません。強いて言えば、大学3年の時、アメリカに1か月

理事・副学長（研究、国際交流、社会連携担当）

村田 光二



Koji Murata

1978年東京大学文学部卒業。1980年同社会学研究科修士課程修了。1985年同博士課程単位取得退学。1986年帝京大学文学部講師、1988年東京学芸大学助教授に就任。1993年一橋大学社会学部助教授、1996年同教授、2000年同社会学研究科教授、2010年同研究科長（2012年まで）を経て、2014年12月から現職。専門分野は社会心理学、社会的認知研究。近著に『複雑さに挑む社会心理学〔改訂版〕』（2010年有斐閣刊）がある。

ほど一人旅をした頃からでしょうか。海外生活は、1989年から5年間、アメリカのウィスコンシン大学マディソン校の大学院経済学研究科で学んだのが最初です。その後すぐボストン郊外にあるブランドイス大学で9か月ほど講師を務めます。また、2001年から1年間、ボストン大学の経済学部でフルブライト研究員として滞在しました。一橋大学の教授になってからも、安倍フェローとしてハーバード大学の日米関係プログラムで研究活動を行う機会を得ることができました。なお、経済学者としての研究活動では頻繁に海外に出かけていましたが、国際交流担当の役員補佐を拝命してからは、その回数が倍増し一月に1、2回ほどになりましたね。多忙な蓼沼学長に代わって、海外での学長会議に出席することも少なくありません。

村田 かなりの回数の海外出張をされていますが、身体的・精神的にきついと感じられたことはないのでしょうか？

古澤 精神的には全く辛くはありません。むしろ逆です。日本にいる時はやることも多くつねに時間に追われていますが、海外では雑務に追われることが少なく、案外ゆったりと時間を使えるからです。成田空港や羽田空港は、私にとってホッとする場所です（笑）。出発時間ぎりぎりになることが多いので、間に合ったという安心感と、これからゆったりした時間が取れるという安堵感でしょうか。



一方の体のほうもきついとは感じていなかったのですが、つい先日ベルリン、パリ、ボストンを10日間かけて回った際は、その後半から風邪をひいてこじらせてしまいました。体は正直に「きつい」と反応したのかもしれないですね。

学生交流協定締結交渉は

片思いの成就と同じ

村田 その海外出張では、一橋大学と海外の有力大学との学生交流協定締結交渉を担っていただいています。授業料相互不徴収の形で学生交流協定を結ぶことは、特にアメリカの有力大学など、日本からは行きたい学生が多く、先方からはそれほど多くない場合にはかなり大変な交渉事だと思います。いろいろとご苦労をされていると思いますが、この仕事についてどうお考えでしょうか？

古澤 まず、学生交流協定を結ぶ相手は、どの大学でも良いということにはなりませんね。一橋大生が行って身になるレベルの学びができるところでなければなりません。ですから、こちらにとってはどうしても一橋大学と同等以上の大学ということになります。もちろん相手も同じように考えますから、学生交流協定を締結しようとする大学間では、どうしてもどちらかの「片思い」のような状態になってしまう。たとえばハーバード大学などは、世界中の有力大学が学生交流協定を結びたいと考えている「高嶺の花」です。そういった世界のトップスクールとも研究者同士の交流は盛んに行っています。学生交流協定となると話は別です。したがって、アメリカの場合は比較的交渉しやすくレベルも遜色ない州立大学に絞っています。

経済学研究科教授・役員補佐（研究、国際交流担当）

Taiji Furusawa

1987年一橋大学経済学部卒業。1989年一橋大学大学院経済学研究科修士課程卒業。1994年University of Wisconsin-Madisonにて経済学Ph.D.を取得。Brandeis University講師、福島大学経済学部助教授、横浜国立大学経済学部助教授を経て、現在一橋大学大学院経済学研究科教授。専門は国際経済学。近著に、「Globalization, Financial Development, and Income Inequality」(with Hiroshi Daisaka and Noriyuki Yanagawa), Pacific Economic Review, 19(5), 612-633, 2014.、『ベーシック経済学：次につながる基礎固め』（塩路悦朗氏と共著、2012年有斐閣刊）がある。



古澤 泰治

村田 アイビリーグなどアメリカの有力大学は、そのように世界中から留学生が集まるので、そもそもキャンパスがグローバル化しています。わざわざ海外に行く必要がないと感じる学生もいるのかもしれないですね。

古澤 そういう側面もあるでしょうね。また、アメリカの大学は公立でも授業料が高いので、海外留学で一年卒業が遅れると何百万円もの出費につながります。それで、そこまでの価値が留学にあるのかと親が難色を示す場合も多いようです。

村田 なるほど。

古澤 ですから、アメリカの学生の場合はせいぜい1か月ほどサマースクールに行つて終わり、という場合が多いですね。たとえばスペインの大学に行き、観光地巡りなども楽しみつ、ちよつとカリキュラムに参加して留学した気分になって帰る、というのが典型的なようです。

村田 そうなのですね。人気の高い有力校とは、どういった交渉を行うのでしょうか？

古澤 交渉に行く、「我々はすでに日本のいくつかの大学と協定を結んでいる。本学の学生がそれらの大学に留学できる枠は8人分あるが、2人しか応募がない。なぜ貴学を増やす必要があるのか？」などと言われることが多いのです。これに対しては、「それらの大学は、確かにいい大学だ。しかし、一橋大学はそれら以上にいい大学だし、留学生の満足度もとても高い。うちを加えるのはあなたの方の利益でもあります」と言うようにしています。

村田 プレゼンテーションに際しては、こういったツールを使うのですか？

古澤 相手が知りたいのは、こちらがいかにかにしっかり

した大学であるのかということ。リサーチ大学としても実績を挙げているところを、どれだけ伝えられるかが勝負だと思います。もちろんさまざまなデータや大学の概要などは見せますが、最も重要なのは、一橋大学がいかに素晴らしい大学なのかを誠心誠意伝えることだと思います。自信を持って一橋大学のことを語れるのは、本学が優れた人材に恵まれているからです。それについてはずねに感謝しています。



村田 大学ランキングはやはり重要な指標なのでしょうね。

古澤 重要です。まずそれがチェックされますから。

村田 最近、日本の大学のランキングは、シンガポールや香港、台湾などアジアの大

学にも追い抜かれるようになっていきます。ランキングを上げるには、国際ジャーナルに採用される論文数をもっと多くする必要がありますが、一橋大学のように社会科学系の学部だけで理系がない場合、やや不利な立場にあると感じています。

古澤 ランキングは上げる必要がありますね。村田副学長のご指摘のとおりだと思いますが、社会科学系でももっと論文を出していかなければならないでしょう。外国の大学では、戦略的に海外から優秀な研究者を多数招いて業績を高めている大学もたくさんあります。

人的つながりが交渉成功の決め手

村田 そういった戦略的な取り組みも検討する必要がありますね。ところで、そもそも交渉相手にはどうやってアプローチされているのですか？

古澤 個人的につき合いのある研究者仲間が世界中の大学にいますので、まずはその人たちから担当者につながりもらいます。最終的に話し合いをする相手は大学全体の副学長だったり、社会科学部門の責任者だったりします。

村田 うまく運んだ交渉で、印象に残っているケースはありますか？

古澤 フランスのトゥールーズ大学のケースです。蓼沼学長の元教え子が、そこで助教として働いています。大変優秀な人です。その人を通じてまずは経済学部の国際担当者につないでもらいました。私はその担当者へ一言、「一橋大学がどれだけ優れた大学であるかは、その卒業生であるあなたの同僚を見ればよく分かるでしょう？」とメールしただけです。それで話がとんとん拍子に進みました(笑)。

村田 素晴らしい(笑)。

古澤 最終的に交流協定の締結が決まったのも個人的なつながりのおかげだと言えます。交渉開始直後、別件で来られたトゥールーズ大学の副学長が国立に寄ってくれました。その方と話し始めたときに意気投合し、会合がとても盛り上がったんです。彼が国立を出る頃には交流協定の締結が決まっていました。

村田 良いお話ですね(笑)。逆に、悔しい思いをされたケースもおありでしょう。

古澤 あるアメリカの大学で、「一橋大学は日本で某大学の次ぐらしいに入学するのが難しい」と話したら、とても驚かれました。つまり、本学は相手に認識されていなかったということです。知名度がまだまだなのは、本学の課題です。そもそも一橋大学には優秀な研究者や学生が集まり、キャンパスも美しく、施設や設備も整っています。一橋大学の魅力をもっと高め、世界中の人に認知してもらいたいと思っています。

村田 なるほど。

古澤 実力はあるのですから、その実力に見合った知名度も国際的に得ていく努力をする必要があると思います。先ほどの論文の話ですが、世界で認めてもらうためには英語で書くことが不可欠です。学問の性質上、経済学部は国際化しやすいので、すでに論文は英語で書くことが当然という状況になっています。日本語で論文を書き、日本で研究成果を発表するのが当然だと考えられている分野があるのも承知していますが、より多くの分野で、より多くの研究者が英語で研究成果を発表するようになって欲しいと思っています。

村田 確かにそうですね。そして、そのような古澤先生のご尽力もあって、本学の学生交流協定は増える一方です。学部に関しては、現在73協定になりましたね。全般的にどういった状況でしょうか？

古澤 前述のとおり、アメリカの大学は総じてハードルが高いのですが、ヨーロッパの大学は昔から積極的です。また、中国や韓国、東南アジアの大学も増えています。先ほどの「片思い」の話ではありませんが、アジア各国には「日本の一橋大学で学びたい」という学生は多い反面、アジアの大学を留学先に選ぶ一橋大生はそれほど多くありません。しかし、中国の大学でも英語による質の高い教育を受けることができるよう

になってきています。今はあちからからの入超ですが、5年後はどうなっているかわかりません。アジア諸国も急速に進歩していますから、アジアの大学はこれからはますます重要なパートナーとなってくるでしょう。

不可欠な〓キャンパス・インターナショナルリゼーション

村田 これまで、日本人学生が海外に出る話をしてきましたが、一方でキャンパスに外国人留学生を招き、学内のグローバル化によって多様性のある環境をつくる〓キャンパス・インターナショナルリゼーション〓という方法もあります。これについては、どうお考えでしょうか？

古澤 世界的に、そうした考え方を意識的に取り入れる大学が増えていますね。キャンパス・インターナショナルリゼーション先進国のアメリカでさえ、ケネディ大使が「日米間の留学生を倍増させる」と掛け声をかけているほどです。しかし、一橋大学は、学生の送り出しばかりに熱心で、キャンパス・インターナショナルリゼーションはあまり意識してこなかったのではないのでしょうか。

村田 特に近年は先述のとおり韓国や中国などアジア諸国からアプローチしていただく機会が増え、現在ではそれらの国々を中心に700人以上の留学生を迎えていますね。

グローバル時代の一橋大学

（現場からの提言）

古澤 確かにそれなりの数の留学生がいますね。しかし、個人的にはキャンパス・インターナショナルリゼーションについても、もっと意識的に取り組む必要があると思います。

村田 たとえば、こういったところに問題を感じていますか？

古澤 教職員の国際化を進めるべきだと思います。今いる外国人数員はほぼ全員が任期つきで、コアメンバ



ーにはほとんどいません。それではどうしても日常的な国際感覚が希薄になると思うのです。事務部門の国際化も必要です。

村田 確かに、留学生を増やしていくと、迎え入れる宿舍が足りなくなったり、学生が提出する書類も英語版を用意する必要があるかもしれませんね。

古澤 異質な考え方や価値観は受け入れたくないといった壁はないと思うのですが、一律にキャンパス・インターナショナルリゼーションを推進しようというふうにはなかなかいかないでしょう。たとえば、授業は日本語で教えるのが良いのか英語にすべきなのはそれぞれの先生によって考え方が違います。

村田 「日本の法律を日本語で教えるからこそ意味が

ある」といった考え方もあります。

古澤 外国人数員を増やすにしても、学内運営上困ることが出てくると思います。仮に外国人数員が3分の1にまでなったら、教授会は日本語でいいのか、英語でやらなければならないのか。お知らせはいいの、英語でやる必要があるのか、等々。しかし、そういったハードルがあるとしても、「だからキャンパス・インターナショナルリゼーションの推進は難しい」とあきらめてはいけません。個人的には、キャンパス・インターナショナルリゼーションは不可避の流れだと思っていますので、難しいからこそ早くから積極的に対応し、国内の先頭を走るくらいであるべきではないでしょうか。

村田 外国人数員の対応としては、たとえば学内運営にはノータッチで構わないようにすると割り切れば、教授会の英語化問題はクリアできると思います。しかし、それ以前にそもそも教員が学内運営に割くエネルギーを削減し、より研究や教育に振り向けるようにする必要があります。

古澤 そのとおりですね。経済学部では、頻繁に世界のジョブ・マーケットに出かけていき、面接して優れた人材を採用しています。

結果的に日本人になることも少なくありませんが、そもそも国際マインドを持った人しか応募してきませんので、そういった人を学内に増やすことで周囲を刺激するというアプローチも必要だと思っています。



一橋大学のグローバル人材育成プログラムについて

村田 ご指摘のとおりですね。ところで一橋大学は、LSE (London School of Economics and Political Science) との間で「一橋・LSEレクチャーシリーズ」という研究交流の仕組みを持っています。古澤先生はその企画運営をしばしば担当されていますが、その経緯や今後の方向性について教えてください。

古澤 LSEは世界屈指の社会科学の総合大学であり、同じコンセプトの一橋大学とは学長同士の親交もあって多面的な協力関係にあります。クレイグ・カルホーン学長には、昨年の本学の入学式で講演していただきました。私は、LSEの東アジア部門を統括しているブレンダン・スミス氏のカウンターパートとして個人的な関係を構築しているのですが、2人でよくどのような協力が一橋大学とLSEの間でできるか話し合ってきたわけです。「一橋・LSEレクチャーシリーズ」の活性化は、アジアに出張に来たLSEの先生を、彼が積極的に私に紹介してくれることで実現しました。今年は2回開催しましたが、1回目はイギリスのEU離脱問題、2回目はアメリカ大統領選挙をそれぞれテーマに、タイムリーで興味深い話が聞けました。これら



は無料で一般公開したわけですが、多くの方に会場いただき、非常に有意義な取り組みになりました。

村田 一橋大学では、2013年度から文部科学省「グローバル人材育成プログラム」事業に採択されたグローバルリーダーズ・プログラム (GLP) が、商学部の「渋沢スカラシッププログラム」(SSP) と経済学部の「グローバルリーダーズプログラム」(GLP) として始まり、2年進学時にそれぞれ15人程度の学生を選抜して、世界で活躍できる人材を育成することを目指しています。このプログラムはそれを受講している本人にとっても大きな意味を持つと思いますが、受講していない学生にも大いに刺激になっていると思います。2017年度からは法学部、社会学部でも本格的にGLPが始まります。さらに、最優秀の学生を本学が学費つきでLSEやオックスフォード大学、ケンブリッジ大学、ハーバード大学といった世界最高峰の大学に送り出す「グローバルリーダー育成海外留学制度」もあります。古澤先生はこれらの取り組みをどのように評価しているでしょうか？ また、今後のようにこのプログラムを発展させていったら良いと思われますか？

古澤 これらの制度には直接的にタッチしていませんが、私のゼミにもGLPに選抜された学生がいて、す

でにリーダーシップを発揮してくれています。ほかの学生も確かなに刺激を受けているようですね。法学部、社会学部にも導入されるのは大変良いことだと思います。「グローバルリーダー育成海外留学制度」も、向上心の高い学生にとっては良い目標になるのではないのでしょうか。こうしたエリート教育も重要だと思いますが、私としてはもっと多くの一橋大生に語学力を高めてもらいたいと考えています。

村田 おっしゃるとおり、国際交流を進めるうえでは語学力、特に英語力が必要です。特に一橋大生には、将来はグローバルステージで仕事をするようになる人が多いでしょう。学生が英語を学ぶうえで大切な点はどうなことだとお考えでしょうか？

英語力の向上で世界が広がる意義

古澤 英語はビジネスや学術交流のシーンで支障なく話せる必要がありますので、学生のうちから準備しておかなければなりません。商学部、経済学部を中心に英語による授業が100科目程度に及んでいるなど、英語で学べる授業が増えました。これらの授業を履修する学生も増え、良いトレンドにあると思っています。私は10年ほど前から英語で教えています。当初は「日本人が日本人相手に」英語で教える意味が不明」といった学生からの授業評価もありました。確かに、始めた当時は履修者がガタツと減りましたから(笑)。最近はそのような声も聞かなくなりました。英語による授業は経済学部でもまだ25%程度だと思いますが、個人的にはすべて英語による授業にしても良いぐらいに思っています。

村田 一橋大学にはもともと英語力の高い学生も多く入学してきますから、それを伸ばしてあげる環境も不可欠ですね。

古澤 海外留学が手の届く範囲にあり、キャンパスには海外からの留学生が多くいますから、学生たちは海外に興味を持ち、英語にもポジティブになっているのではないのでしょうか。

村田 古澤ゼミは学生からの人気が高いのですが、どのような方針で運営しているのでしょうか？ また、学生たちはどのようにゼミ活動をしているのでしょうか？

古澤 人気があるかどうかは分かりませんが（笑）、一から十まですべて英語です。ゼミ生の採用面接も英語です。「来週は休み」といったお知らせも全部英語。どこまで伝わっているか、心配になることもあります（笑）。

村田さすがに徹底されていますね。

古澤 私は、英語で話すことに不自由を感じなくなつてから、世界が大きく広がりました。英語は道具に過ぎませんが、その道具を使いこなせば、世界中の人と臆することなく会話や議論ができます。物事を考える際の引き出しの数が比べものにならないほど増えました。

村田 私はとてもそんなレベルではありませんが、おっしゃることはよく分かります。

古澤 ゼミ中に雑談している学生には「となりと話す

んだったら、それも英語できるように」と言っています。英語で話せるようになるだけではなく、日本人同士で英語を話すことにも慣れて欲しいと思っています。外国人も混じっている輪の中で、日本人同士が日本語で言葉を交わすシーンに出くわすことがあります。これからますます増えてくるだろうと思われるそのようなシチュエーションで、そこにいるすべての人が理解できる言葉で話をする習慣を身につけるのとても重要だと思います。

グローバル化に向けたさらなる取り組みの必要性

村田 なるほど。グローバル人材にとっては不可欠の視点ですね。一橋大学では、古澤先生がおられる経済学部に加えて商学部が頑張ってくれたおかげで、法学部と社会学部にもその恩恵が及んでいるところだと思っています。そこで、今後、大学全体としてどのようにグローバル教育を強化していくべきか、お考えをお聞かせください。

古澤 まずは、先ほども述べた教員の国際化に着手するのが良いと思います。それにより、英語による授業を増やしたいですね。そうすることで、たとえば中国

や韓国のより優秀な留学生も取り込むことができます。留学を考えているアジアの学生は、まずそのために何語を学ぶべきか考えます。そのとき当然、日本語よりも、つぶしが効く英語を選ぶ傾向があります。そして欧米の大学に出願するわけです。そうした層の学生に、一橋大学を出願先に加えてもらいたいと思っています。本学に出願する学生のプールが広がれば、結果的にこれまで以上に優秀な学生が入ってくるでしょう。もちろん、本学の日本人学生にももっと海外に行ってもらいたいと思います。そのためには、交換留学先を増やしていきたいです。

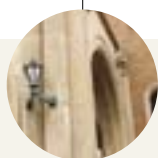
村田 海外へのプロモーション活動も必要ですね。

古澤 そのためには、ランキングを上げることも必要ですし、個々の教員がこれまで以上に海外に出て、一橋大学の名前を世界の研究者仲間知ってもらうことも有効です。

村田 世界中にある如水会の拠点にも大いに尽力いただいていますね。ありがたいことです。

古澤 私自身も、如水会北京支部に温かく迎えてもらったことがあります。一橋大学は間違いなくグローバル人材の育成に尽力していますが、しかしまだまだやるべきことは残っています。海外での学長会議に参加し、国境を越えた大学間協力の議論を聞いているうちに、「二人ひとりの学生を一つひとつの大学で教育する時代ではなくなってきた」と思うようになりました。大学は、ローカルな教育に携わる大学と、世界的な大学教育に組み込まれる大学に二分化されていくと思います。一橋大学は後者の大学として、世界の人を世界の大学と共同で教育し続けていきたいと思っています。

村田 同感です。本日はありがとうございました。



グローバル時代の一橋大学
（現場からの提言）



一橋大学の肖像画

—言語社会研究科教員の独白

言語社会研究科准教授 小泉順也

つい最近まで、一橋大学附属図書館二階の大閲覧室と一階のカウンター周辺に、二九点の肖像画と二点のレリーフが飾られていた。これらは一橋大学とその前身の東京商科大学の先生方を描いたもので、威厳ある姿を記憶されている方も多いだろう。しかし、現在の学生には何を言われているのか分からないかもしれない。というのも、二〇一四年五月七日に一点の肖像画が突然壁から落下したため、利用者の安全と作品の保護を考慮し、すべてを倉庫に保管することになったからである。残念ながら、現在でも実際に目にする機会は失われたままとなっている。

これまでも肖像画の概要は大学のホームページの「大学案内」の項目にある「学内肖像画・銅像等コレクション」によって知ることができた。こうした情報を早くから積極的に公開してきた点は高く評価できる。そして、特集が組まれた今号の『H Q』は大事な一歩となるだろう。これらの修復や公開に向けた検討は、



福田徳三

1874（明治7）年－1930（昭和5）年

荒井陸男／作

1931（昭和6）年

画布・油彩 90.8×72.7cm

東京神田生まれ。一橋大学の前身である高等商業学校に進学し、本科3年の時には、成績優秀者として北関東・長野・北陸計7県の商工業を視察し、修学旅行報告書を提出する。1896（明治29）年に高等商業学校の講師になり、翌年にドイツに留学した。ミュンヘン大学で、終生の師ブレンターノと出会い、日本経済史に関する学位論文を執筆する。1900（明治33）年に高等商業学校の教授に任命され、その翌年、教員7名（石川巖、石川文吾、神田乃武、滝本美夫、津村秀松、志田鉦太郎、関一）とともに「商科大学設立ノ必要」を起草（ベルリン宣言）。一橋大学の前身である東京商科大学の設立及び日本の経済史に多大な功績を残した。

資金的な問題もあって進んでいないのが現状であるが、耳の痛い話はひとまず脇に置きたい。まずは肖像画の存在に改めて目を向け、歴史的経緯や保存状態を理解してからでなく、肝心の議論は始まらないからである。

附属図書館だけでなく、他の場所でも管理しているものも合わせると、現在一橋大学には約四十点の肖像画が所蔵されている。判明している限りの正確な数字は三八点であるが、未発見のものがどこかに眠っている可能性は否定できない。古いものは関東大震災によって焼失したと考えられ、基本的には国立キャンパスに移転してから制作されたものである。確かに各地を見回せば、旧帝国大学や大規



模な私立大学には美術品のコレクションが所蔵されている。たとえば、東京大学が一九九八年に「東京大学コレクションⅧ——博士の肖像」と題した展覧会を開催した時、学内の所在調査によって約一〇〇点の肖像画のリストがつくられた。そこには菅原道真や坂上田村麻呂といった歴史上の人物も含まれているが、大学が所蔵する肖像画の量的な上限を考える時の参考になるだろう。

その一方で、一橋大学が所蔵する約四十点の肖像画も、全国的に見て指折りのコレクションと言って良い。一部の画家の名前を列挙すると、東京藝術大学の前身である東京美術学校校長を務め、文化勲章を受章した和田英作、帝国美術院及び日本芸術院会員に任命された中澤弘光、東京美術学校教授を経て文化勲章を受章した安井曾太郎、日本美術家連盟理事長や日本芸術院会員に任命された宮本三郎など、日本近代洋画の歴史を飾る錚々たる顔ぶれが並んでいる。もちろん、肩書きや受賞歴がすべてではないが、大半は卒業生の寄付に基づいて大学に寄贈されたという経緯があり、経済力のある卒業生を多く輩出してきた大学の歴史的経緯が反映されている。

しかし、近くで肖像画を眺めてみると、適切に保管されてきたとは言いがたい。画面はチリや埃で汚れており、寒暖差や日光の紫外



《修復前》長年、大閲覧室に飾っていたので、鳩の糞、埃などで汚れている



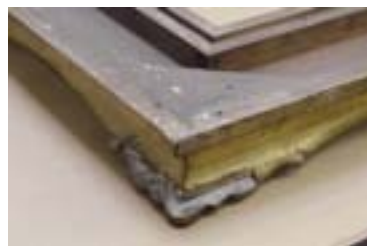
《修復前》紫外線蛍光を当てると、亀裂と後年の加筆状況が分かる



《修復前》斜光線を当てると、画面の亀裂がよく分かる



《修復後》



《修復前》額縁には部分的に欠損や亀裂が見られる



《修復後》

線で劣化した絵具は随所でひびが入り、大きく剥落している部分も散見される。大閲覧室に冷房が整備されていなかった時代には、日常的に窓を開け放っていたため、館内に鳩が入り込んできていた。そのため裏面には大量の鳩糞が付着しており、どういうわけか顔の頬に白い鳩糞がこびりついたものもある。数十年のあいだ何の手当も受けずに放置されてきたため、程度の差はあれ、修復しなければ公開できる状態ではないのである。

このような中で二年前に、『福田徳三』と『中山伊知郎』の二点を修復する貴重な機会を得た。具体的な作業としては、画面に加えて、裏面や額縁も含めてきれいに洗浄された。剥落した箇所には補彩がなされ、浮き上がった絵具層は固着された。また、埃や紫外線を防ぐ低反射のアクリルが前面に入れられ、見違えるような姿になって戻ってきたのである。修復前の『福田徳三』には顔の周りに幾筋も亀裂が入っており、どことなく悲しい表情に見えていた。それが正面をしかと見据えた精悍な顔つきとなって蘇った。

今回の修復を記念して、平成二八年五月一二日から一八日にかけて、「学者の肖像 学者の風景——福田徳三・中山伊知郎展」と題した展覧会が図書館展示室で開催され、期間中に約四〇〇人の来場者があった。久しぶりに肖像画と再会する機会となったが、きれいに額装された油彩画は展示室で輝きを放っていた。あわせて関連する書籍や資料が展示され、先生の学問的功績や意義も分かりやすく提示さ



《修復前》黄色や茶褐色に変色したワニス、下に垂れたワニスを適宜取り除き、本来の色彩を取り戻した



《修復後》



《修復後》



中山伊知郎

1898（明治31）年－1980（昭和55）年

三重県生まれ。1920（大正9）年に一橋大学の前身である東京商科大学に入学し、翌年に福田徳三のゼミナールに所属し指導を受ける。後に中山は「一橋に来て福田先生の講義を聞かなかったら、おそらく私は経済学者になっていなかったに相違ない」と語っている。卒業後は東京商科大学助手に就任。1927（昭和2）年から1929（昭和4）年にかけてドイツに留学した。1949（昭和24）年に商科大学長に就任し、同年5月の改組にあたり、初代「一橋大学長」となった。吉田内閣のブレーンも務めるなど、経済政策の面でも尽力した。

宮本三郎／作
1961（昭和36）年
画布・油彩 72.6×60.7cm

れていた。

各地の美術館を巡っていると、『ある男の肖像』といったタイトルの作品にたびたび出会う。街角で似顔絵を生業としているならばいざ知らず、モデルを前にした画家がその名前を知らないはずはない。画家自らこうした題名を付けることもあるが、人物を特定する手掛かりが後年に失われたり、無名ゆえに明示しなかったりする場合が大半である。当時は著名な先生であっても、数十年、さらには一〇〇年を超えて記憶していくのは容易ではない。警咳に接した教え子や関係者が少なくなくなる中で、丁寧^{けいがい}に業績を解説しながら学問史に位置付け、人柄を偲ぶような資料や証言を残していかなければ、いつなるとき『ある先生の肖像』ともなりかねない。

東京商科大学が国立に移転した頃の高等教育機関就学率は五パーセントに満たず、多くの学生はある種の特権的意識を共有していた。当時の大学は特別な存在であり、高等教育の門戸は狭かった。今に残る肖像画には学恩という個人的な想いだけでなく、歴史の中で醸成されてきた矜持^{きやうじ}も反映されている。肖像画を通して、過去の人物、学問、時代をひもとく試みは可能である。どのように保存しながら活用を図っていくのか、今回の特集はその議論に一石を投じるきっかけになるだろう。



文化資源としての一橋大学

宮本三郎

みやもと・さぶろう

1905 (明治38) 年—1974 (昭和49) 年

石川県小松市に生まれる。能美郡御幸村日末小学校、小松中学校で学ぶ。画家と軍人のいずれの道に進むべきか迷う中、陸軍幼年学校の受験不合格から中学校を中退し、画家を志して神戸に出る。1922 (大正11) 年に上京し、故川端玉章が創設した川端画学校洋画部に入り、富永勝重、藤島武二に師事。また、安井曾太郎や前田寛治からも指導を受けた。関東大震災後に京都に移り、関西美術院で黒田重太郎の指導を受ける。初期は女性、裸婦、家族の姿を鮮やかな色彩と確かな素描でとらえた作品で注目を集める。1927 (昭和2) 年に二科展に初入選を果たし、1932 (昭和7) 年に二科会会友に推挙される。1934 (昭和9) 年に銀座画廊で初めての個展を開催。1936 (昭和11) 年に二科会会員に推挙される。

1938 (昭和13) 年に渡欧し、パリを中心に滞在。ルーヴル美術館で模写を行い、アカデミー・ランソンに登録する。フランス、イタリア、スイス、イギリスの美術館や遺跡を巡った後、第二次世界大戦の戦火を逃れて1939 (昭和14) 年に帰国。藤田嗣治や小磯良平などとともに陸軍報道班員としてマレー半島、タイ、シンガポールなどに派遣され、『山下、パーシバル両司令官会見図』、『海軍落下傘部隊メナド奇襲』などの写実的な戦争記録画によって高く評価された。

戦時中の暗い色調の時期を経て、戦後はいっそう艶やかな色彩を用いて、舞妓や裸婦などの主題に取り組んだ。1947 (昭和22) 年に熊谷守一などと二紀会を創設。金沢美術工芸専門学校 (現在の金沢美術工芸大学) 教授、多摩美術大学教授などを務め、後進の指導にあたった。日本美術家連盟理事長、日本ユネスコ国内委員会委員などの要職を歴任し、1966 (昭和41) 年に日本芸術院会員となる。1974 (昭和49) 年に東京で死去。故郷の石川県に小松市立宮本三郎美術館、後半生にアトリエを構えた世田谷区奥沢に世田谷美術館分館宮本三郎記念美術館が開館している。

荒井陸男

あらい・ろくお

1885 (明治18) 年—1972 (昭和47) 年

東京府芝区に生まれる。六男であったことから陸男^{ろくお}と命名された。父の郁之助は戊辰戦争の箱館戦争で海軍奉行を務めた幕臣で、明治期には初代の中央气象台長に就任し、浦賀船渠 (後に住友機械工業が合併) の創設にも尽力した人物であった。生地^{きぢ}の芝西久保の靱絵小学校を経て、麻布中学、日本中学、京都の同志社などで学ぶ。

幼少期より画業に関心を示し、周囲の反対を押し切って画家を志す。独力による海外渡航を思い立ち、1909 (明治42) 年からロンドンの美術学校に通い、2年後には当地の新聞雑誌に挿絵を提供するようになる。滞在中にはイタリアやアメリカなどにも足を延ばした。第一次世界大戦中には海軍の従軍画家として海洋画を制作。1921 (大正10) 年から1923 (大正12) 年まで家族でフランスに滞在するが、帰国後は鎌倉で関東大震災に見舞われる。1924 (大正13) 年に旅順を訪れ、日露戦争の旅順開城の下絵を描く。1928 (昭和3) 年に乃木希典とステッセルの水師営での会見を描いた『日露役旅順開城』を完成させ、明治神宮外苑聖徳記念絵画館に奉納する。1938 (昭和13) 年にオーストラリアに渡り、翌年、第一次世界大戦中にインド洋沖で行われた日英共同作戦を描いた『軍艦伊吹の濠州軍輸送掩護』を完成させ、日濠協會を通して同国に寄贈した。

第二次世界大戦中に東京の自宅が焼失。1951 (昭和26) 年まで軽井沢の別荘に移り、アメリカ軍将校、最高裁判所長官の三淵忠彦などの日本の要人の肖像画を描く。1956 (昭和31) 年に『日中貿易協定・東京調印式の図』を完成させ、中国から国賓として招聘され、本作を携えて北京に渡る。滞^ど在時に毛沢東主席の肖像画の注文を受けるが、1968 (昭和43) 年のアトリエの火事で焼失する。1972 (昭和47) 年に東京で死去。特定の団体や組織に属さず、独立不羈^{どくし}の精神を貫き、歴史画や海洋画の大作も手掛けながら、明治、大正、昭和の時代を生きた画家であった。

◆『福田徳三』『中山伊知郎』両作品の詳細な解説は、附属図書館ウェブサイトにてご覧いただけます。

『学者の肖像 学者の風景: 福田徳三・中山伊知郎展』 <http://www.lib.hit-u.ac.jp/pr/tenji/tokubetsu/fukuda-nakayama/>

文化資源としての一橋大学



言語社会研究科准教授 小泉順也

Innovation

文化資源としての一橋大学

一橋大学の起源である商法講習所の創設から、一四〇年以上の時間が流れた。昨

今の大学を巡る動きは速く、過去を悠長に回想する余裕は失われ、昔を懐かしく語り合う機会も少なくなってしまったかもしれない。学生は勉学や課外活動などで忙しく、以前と比べれば教職員の人れ替わりも激しくなっている。しかし、未来は過去から続く時間の先に展望されるべきもので、慌ただしい日常の中でも、改めてこの大学が刻んできた歴史を振り

返り、その歩みを共有する作業が求められている。

これまでの歴史において、一九二三（大正一二）年の関東大震災は大きな被害をもたらした。当時の大学の建物や備品の大半は失われた。ゆえに、震災以前の資料は僅かしか残されていない。それと同時に一橋大学が国立に移転して、まもなく八〇年を迎えようとしている。はるか遠くにおぼろげに浮かぶ明治期の姿はともかく、昭和初期から始まった国立キャンパスについては、目を凝らせば思いがけない歴史の痕跡や断片は見つけられる。

たとえば、本館と法人本部棟のあいだの駐車スペースには、白い文字で「バス」とうっすら書かれた部分がある。現在は小平国際キャンパスとなった場所に小平分校が設置され、そこで授業が行われていた時代、国立と小平を結ぶバスが運行されていた。当時を直接知らない教職員

は私を含めて増えてきているが、かつてバスの車内で著名な先生と隣り合わせになって極度に緊張したり、あるいは普段と違う話題に花が咲いたりしたという話を伺ったことがある。具体的な事物に触れた時、とりとめもない過去が不意に思い出され、はつきりとした像を結ぶことがある。変わらぬものや以前と同じ風景があつて初めて、それぞれが過ごした時間や体験が想起されるというものである。

過去をきちんと保存するという意味では、二〇〇〇年に兼松講堂、旧門衛所、東本館の三つの建物が国の登録有形文化財（建造物）に指定された。しかし、「文化財」という大きな看板を掲げなくても、歴史的、文化的な意味において潜在的価値を持ち、文化財の一手前前の状態にあるものを「文化資源」と呼ぶことはできるだろう。文化財は登録制度に支えられ、そこには明確な基準が存在する。一方で





肖像画が飾られていた頃の附属図書館大閲覧室

文化資源という曖昧な言葉は、現在の価値観ですべてを判断するのではなく、残せるものを残していく中で最終的な選択を未来に委ねる態度につながっている。資源というすぐに活用・発想につながるが、そのような短絡的なことではなく、今ここにあるものを次世代に継承しようとする姿勢が問われている。

言語社会研究科では二〇一五年六月六日に公開講座「文化資源としての一橋大学——新しいキャンパス案内」を開催した。具体的には、銅像、肖像画、建築、コンサート、鳥と自然、語学教育など、さまざまな視点から大学を紹介する試みであった。その様子は『H Q』48号で簡単に紹介されており、研究科紀要『言語社会』10号で特集が組まれている。大学が所蔵している文化財、広い意味での文化資源を活かしながら、新たな価値や魅力を発見、あるいは再発見する試みを展開していくことは十分に可能だろう。

国立キャンパスには確かに新しい建物は増えたが、それでも先人の多大な努力のおかげで美しいキャンパスの景観は保たれている。学内の雑木林には多様な鳥類が生息しており、その中には猛禽類を観察した記録も残されている。古い建物

にある事務室や研究室などでは、東京商科大学の備品プレートの付いた什器をよく見かける。六十点弱の肖像画、銅像・彫像、レリーフも抜本的な修復が必要であるとはいえ保存されている。公開されてはいないが、東本館には機械類を中心とする膨大な量の商品や製品を並べた商品陳列室、原材料から商品までの製造プロセスを分かりやすく展示した商品標本室が存在する。

つまるところ、一橋大学は文化資源の宝庫なのである。これらをどのように保存しながら活用するのか、その道筋は明確に示されていない。そこに向けた第一歩として、まずは学内に何があるのかを多くの人に知ってもらうところから始めなくてはならない。何気なく行き来するキャンパスには、多くの未知の空間が広がっている。部屋の片隅や建物の裏側にさりげなく置かれているもの、草木に生息する動植物、普段は足を踏み入れない場所からの眺めなどを再認識した時、これらを活かした新たな価値や魅力の創出をめぐる議論が始まるのだろう。学問や人間を通じた出会いだけでなく、一橋大学には探検心や冒険心を存分にくすぐる文化資源が眠っているのである。

一橋大学には、国内屈指の肖像画コレクションが眠る



内池廉吉／石河光哉 作



A. J. Hare／石河光哉 作



藤村義苗／有島生馬 作



福田徳三／荒井陸男 作



山口弘一／石河光哉 作



堀光亀／石河光哉 作



根岸佶／石河光哉 作



関一／石河光哉 作



井浦仙太郎／刑部人 作



高垣寅次郎／伊原宇三郎 作



吉田良三／石河光哉 作



山口健太／石河光哉 作



木村恵吉郎／児島喜久雄 作



矢野二郎／伝 黒田清輝 作



藤本幸太郎／木下孝則 作



井藤半弥／木下孝則 作



内藤章／田辺至 作



佐野善作／田辺至 作



太田哲三／高島達四郎 作



青山衆司／清水登之 作



W. C. Whitney／中山正実 作



鹿野清次郎／中澤弘光 作



中村進午／津田耕造 作



成瀬隆蔵／田辺至 作



中山伊知郎／宮本三郎 作



上田貞次郎／宮本三郎 作



星野太郎／水船三洋 作



山口茂／野田好子 作



増地庸治郎／安井曾太郎 作



山内正瞭／森田元子 作



山中篤太郎／宮本三郎 作



三浦新七／宮本三郎 作



奈佐忠行／和田英作 作



高瀬莊太郎／和田英作 作



下野直太郎／和田英作 作



石川文吾／和田英作 作



上田辰之助／和田三造 作



文化資源としての一橋大学

これらの肖像画は現在、附属図書館（保管室）等に収蔵されています。

本企画において掲載している肖像画は、著作権による保護期間が経過したものを除き、著作権者の許諾を得て掲載していますが、一部、著作権者が不明なものを含みます。今回、肖像画の性質と本企画の趣旨に則り、当該肖像画も掲載しておりますが、情報をお持ちの方は広報室までお寄せください。

◆著作権者が不明な作家 伊原宇三郎、高島達四郎、田辺至、津田耕造、有島生馬

◆一橋大学総務部広報室 Tel: 042-580-8032 E-Mail: pla-ko.g@dm.hit-u.ac.jp

ユニークな競争戦略を実践している
日本の企業・事業を表彰する

ポーター賞



2001年に創設され、今年16回目を迎える《ポーター賞》。

毎年数多くの企業・事業部からエントリーがあり、

2段階の厳正な審査を経て最大4社がその栄誉に輝いている。

これまで、キャノン、松井証券、武田薬品工業、ベネッセコーポレーション、

バンダイ、ファーストリテイリング、キリンビール、東京糸井重里事務所、

星野リゾートなど、業種も規模も異なるさまざまな企業が応募し、受賞を果たしてきた。

現在は、年末の受賞企業発表（及び授賞式）に向けて、

二次審査を通過した企業に対し、審査員によるインタビューを終えたところだ。

今回、『HQ』では運営委員会メンバーの

国際企業戦略研究科（一橋ICS）・大園恵美教授を取材。

同賞の目的や、独自のエントリースタイル、

応募及び受賞のメリットなどについて改めて伺った。

さらに、2015年度の受賞企業の中から、

工芸SPAを手がけ、『花ふきん』などのロングセラー商品を生み出した

「中川政七商店」代表取締役社長 十三代・中川淳氏への取材も実現した。

《ポーター賞》に応募した狙いや同賞への期待など、

中川氏の熱い思いを伺っているので併せてお読みいただきたい。

日本企業の競争力を 向上させるために

まずは《ポーター賞》について、改めてご紹介しよう。

《ポーター賞》は、製品、プロセス、経営手腕においてイノベーションを起こし、これを土台として独自性がある戦略を実行し、その結果として業界において高い収益性を達成・維持している企業を表彰するため、2001年7月に創設された。名称はハ

ーバード大学のマイケル・E・ポーター教授に由来している。

賞の目的は、日本企業の競争力を向上させることにある。日本企業は1970～80年代における全社的品質管理（TQC）や継続的改善運動（カイゼン）をはじめ、世界における業務の効率化競争において、長年にわたりコストと品質面における優位を享受してきた。しかしながら、この競争モデルには限界があることが、よりいっそう明らかになりつつある。日本企業は、品質による競争にとどまるのではなく、

真の収益性をもたらすような独自性のある戦略をつくり上げるべきである。——《ポーター賞》が創設された背景には、このような問題意識があった。

「個別に見ていけば、ユニークな競争戦略を実践している企業はたくさんあります。日本の同じ制度の下でやっているけれどできていて、その具体例をどんどん紹介することで、競争戦略に基づいたユニークさを追求する企業を増やしていきたい……というのがこの賞をつくった一つの理由なんです。そういう意味では、応募された企業や事業部の方々も

もちろん、『ポーター賞』に関心を持ってくださる皆さんが、何かしらインスピレーションや教訓を得られるような面白い企業に受賞いただきたい、紹介し続けたと考えています」

(一橋ICS・大園
恵美教授)



大園恵美教授

2段階の審査を通して 最大4社を選出

応募から受賞までの大まかなスケジュールは、以下のようになっている。

毎年1月下旬、ホームページや日本経済新聞の記事広告などにおいて募集を告知。5月のゴールデンウィーク明けから6月初旬にかけて応募を受け付ける。

審査は2段階に分かれている。応募受け付け後の第一次審査では、4つの審査基準から応募企業を審査する。4つの基準とは、「各業界において優れた収益性を維持しているか」「各業界において他社とは異なる独自性のある価値を提供しているか」「戦略に一貫性があるか」「戦略を支えるイノベーションが存在するか」である。この4つの審査基準をもとに絞り込まれた企業が、第二次審査に進む。

そして、「資本の効率的な利用」「独自のバリューチェーン」「トレードオフ」「活動間のフィット」という審査基準をもとに、書類審査及びインタビューが9月いっぱい実施され、11月上旬までに受賞企業が発表される……という流れだ。その後12月上旬には授賞式・セミナーが開催される。

「我々運営委員会は審査委員会から独立した存在

です。応募にあたってさまざまな相談を受けています。『応募用紙を書いてみたけれどもこれで伝わるだろうか?』『我々のユニークさは本当にここに出ているだろうか?』などの相談には、限られた期間・時間ではありますけれども対応しています。直接お目にかかり、業界の外の人に対してどういうふうにすればうまく伝わるか、などのアドバイス差し上げています。ご自分たちが当たり前にやっていることについて、あえて『何故やっているの?』と伺ったり、逆に『他社がやっていることをやらない理由は何ですか?』と伺ったり……。このようなやり取りを通して、応募企業さんのイメージもより明確に固まっていくようです。皆さんにとってのベネフィットになるように、我々運営委員会を、ぜひ上手に活用していただきたいですね」

(大園教授)

ポーター教授と 一橋大学との関係

『ポーター賞』の名称の由来となったマイケル・E・ポーター教授についてもふれておこう。

マイケル・E・ポーター教授は、ハーバード・ビジネススクールに属する、ハーバード大学ヴィショップ・ウィリアム・ローレンス・ユニバーシティ・プロフェッサーだ。「ユニバーシティ・プロフェッサー」とは、同大学の教員に与えられる最高の名誉であり、この名誉を与えられた教員はポーター教授を含め、ハーバード・ビジネス・スクールではわずか15人しかいない。ポーター教授は4人目にその名誉を与えられている。

ポーター教授は競争戦略論と国際競争力研究の第一人者であり、17冊の本と125の論文の著者でも

ある。戦略論に関する主な著作には、『Competitive Strategy: Techniques for Analyzing Industries and Competitors』(1980年。日本語版は『競争の戦略』ダイヤモンド社、1982年)、『The Competitive Advantage of Nations』(1990年。日本語版は『国の競争優位』ダイヤモンド社、1992年)、『Can Japan Compete?』(2000年。日本語版は『日本の競争戦略』ダイヤモンド社、2000年)などがある。

ポーター教授と一橋大学の関係は1980年代前半に遡る。1960年に『The Competitive Advantage of Nations』(前掲)として出版されることになる大規模な研究調査の一環として、日本についての共同研究を行った。また、『日本の競争戦略』(前掲)のためにも、一橋大学との共同研究が行われている。特に『日本の競争戦略』は、日本経済の奇跡の源泉について長い間信じられてきた説に異論を唱え、戦略に基づいた競争という、将来に向けての新しい道を示した。同書は一橋大学の竹内弘高名誉教授との共著であり、英『エコノミスト』誌の選んだ2000年のノンフィクション上位3冊に選ばれている。

「第一次と第二次審査の応募用紙の質問項目については、この賞を立ち上げる時に、我々とポーター先生と議論して決めました。ですから、ポーター先生の競争戦略論から見て、何がユニークな競争戦略なのか、それがどういうふうにできているものなのか、質問に答えていくことで自然に分かるようになっていきます。応募された企業の方々にとっては良い整理の機会になりますし、審査員にとっても、同じ一つの理論に基づいてそのユニークさを測れます。つまり、お互いにとって非常に分かりやすいフレームワークになっているのです」(大園教授)

2015年度の

受賞企業及び授賞理由

すでに2016年度の審査が佳境に入っていることは冒頭でお伝えした通りだが、ここで2015年度の受賞企業・事業部4社と、各社の授賞理由について短く紹介しよう。※順不同

株式会社IBJ

・業務内容：婚活支援事業

・授賞理由：婚活コンパや婚活サイトといった顧客にとって入りやすい入り口から結婚相談所まで、切れ目ないサービスを提供、高い成婚率を実現。

株式会社カネカ カネカロン事業部 頭髮裝飾商品事業

・業務内容：頭髮裝飾商品向け合成繊維事業

・授賞理由：アフリカの女性向け頭髮裝飾商品市場を育成すると同時に高付加価値化。

パリューチェーンの各プレイヤーが成長を享受できる仕組みを構築。

新生プリンシパルインベストメンツ株式会社

・業務内容：中堅・中小企業向け投資銀行業

・授賞理由：首都圏の中小・中堅企業に特化。創業支援から事業再生まで、企業のライフサイクルを通じて支援。

株式会社中川政七商店

・業務内容：工芸品をベースとした生活雑貨の企画・製造卸・小売業

・授賞理由：工芸業界初のSPA業態。詳細な授賞理由については、各企業・



2015年度ポーター賞受賞企業の皆様。左から、新生プリンシパルインベストメンツ株式会社代表取締役社長（当時）小座野喜景氏、株式会社IBJ 代表取締役社長 石坂茂氏、株式会社中川政七商店 代表取締役社長 十三代 中川淳氏、株式会社カネカ 取締役常務執行役員 天知秀氏、ポーター賞アドバイザー・ボード 竹内弘高（一橋大学名誉教授）



ポーター賞授賞式では、「競争力」をテーマにしたカンファレンスが行われ、マイケル・E・ポーター教授によるビデオレクチャーも上映された。



ポーター賞運営委員を務める一橋ICS・楠木建教授による授賞式でのスピーチ

受賞企業が得られる メリットの大きさ

《ポーター賞》が、受賞企業にもたらすメリットは計り知れない。たとえばグローバルでの認知向上や、受賞企業間のネットワーク構築などが挙げられるだろう。

前者のグローバルでの認知向上に結びついた結果として、大藪教授はマルホ（医療品製造販売業・2007年度受賞）やテルモ・心臓血管カンパニー・カテーテルグループ（医療器具製造販売業・2010年度受賞）などを例に挙げる。

「マルホさんは皮膚科関係では国内トップメーカーです。ただ皮膚科の分野は各国ともローカルメーカーが強いんですね。だから海外に出るとまだまだ認知度が低かったのです。そこで海外展開に向けて

提携先を探していたところ、ポーター賞の受賞で一気に海外からのオファーが増えたそうです。また、テルモさんではアメリカのチームが受賞をとっても喜んでいただとのこと。競争戦略に純粋に特化した賞はあまりないように思います。そのユニークさが、グローバルでの認知向上に貢献しているのではないのでしょうか」（大藪教授）

後者のネットワーク構築については、創設10周年を記念してスタートしたポーター賞クラブなどの機会が挙げられる。

「授賞式が行われる日の午前

ユニークな競争戦略を実践している日本の企業・事業を表彰する《ポーター賞》

Innovation

中に、これまでの受賞企業のC x O以上の役職者の方々をお招きして、クローズド・ドアで経営に関する議論を行います。若い企業もあれば歴史の長い企業もある、サービス業もあれば製造業もある、という顔ぶれの中でお互いにネットワーキングして意見

交換ができます。面白い場だと思えますね。そのメンバーに加わることができるのも、ポーター賞の付加価値として大きくなってきています」（大藪教授）さらに言えば、受賞企業だけがメリットを享受するわけではないだろう。応募することで自社の競争

戦略の明示化に成功した企業、受賞企業のアーカイブを参照しながら自社の競争戦略に活かそうと考える企業、アカデミアに携わる研究者などへの影響力は計り知れない。その懐の深さこそが《ポーター賞》と言えるのではないだろうか。

ポーター賞を受賞したことで、上場する必要がなくなりました



株式会社中川政七商店
代表取締役社長 十三代

中川 淳氏

構想で勝負するタイプの 自分にとって一番欲しい賞だった

ポーター賞の存在は、日本経済新聞の広告などで知っていました。もちろんポーター教授の著作もよく存じ上げています。実は2012年前後にも一度応募しかけていたのです。ただ、2016年に当社は創業300周年を迎えるので、そのタイミングに合わせてということ、2015年度のポーター賞に応募し、賞をいただくことができました。

国内のいわゆる経営賞についてすべては存じ上げませんが、私が一番欲しかったのはポーター賞です。経営者にはさまざまなタイプの方がいますが、私は

馬力でゴリゴリと社員をモチベートするのではなく、「構想」で勝負していくタイプです。ですからユニークな競争戦略があつて、しっかり結果が出ていることを評価していただけるポーター賞が、一番欲しかったのです。もう一つ、個人的に、ポーター賞は「スマートでかっこいい」という印象を持っていました。それは一橋大学に対するイメージにも共通しているかもしれません。

ビジネスの世界への露出が増え、 会社の状況が大きく好転

私自身は自社の競争戦略について頭の中で整理できているつもりなので、審査用のフォーマットを書くプロセス上の収穫は限定的だったと思います。それよりも受賞して一番大きかったのは、上場をやめたことです。

実は2016年2月の決算をもって上場の申請をする予定でした。上場の最大の目的は、優秀な社員を採用することにあります

た。ただ、受賞後の2015年11月11日に創業300周年の記者発表を行った際にはたくさんのマスコミの方に来ていただきましたし、経済ニュース番組やビジネス雑誌ほかでも取り上げられるなど、「ビジネス方面での露出」がかなり増えたのです。おかげで社員の採用も好転し始めています。それらすべてのきっかけが、ポーター賞の受賞でした。

いわゆる本当のビジネスの世界に、ポーター賞を通じて名前が出たことが、会社の状況を大きく変えてくれたと思っています。歴代の受賞企業の中でも、当社が受賞を一番喜んでいいるという自信があります。（談）

株式会社中川政七商店

日本各地の工芸品をベースにした直営店を全国に展開。創業は享保元（1716）年、初代の中屋喜兵衛が奈良晒（ならざらし）と呼ばれる高級麻織物の問屋業を興したことに始まる。中川淳氏は2000年、京都大学法学部卒業後、富士通株式会社での勤務を経て、2002年より株式会社中川政七商店に入社、2008年2月に代表取締役社長 十三代に就任。



平成28年度春季公開講座

「憲法のいま」

一橋大学では、1984年より、毎年春と秋の2回、本学の教育を広く社会に開放し、地域社会の文化の向上に資することを目的に「公開講座」を開催している。
平成28年度の春季公開講座は、「憲法のいま」をテーマに、満員の受講者を集めて行われた。



2015年9月19日に参議院

本会議において可決・成立した安保法制。この流れを受けて、憲法論議が国民の大きな関心を集めている。そこで、2016年6月4日に行われた公開講座は「憲法のいま」をテーマに設定。会場となった国立西キャンパス本館21番教室には、満員となる約250人の受講者が集まり、関心の高さをうかがわせた。



本講座は、本学の法学研究科や法科大学院の教授ら5人による各15〜20分の講演と、質疑応答を基本にする全体討論という構成で、3時間にわたって行われた。

「民主主義のいま」

総司会を務めた法学研究科の只野雅人教授による「いま、憲法を考える意味」と題した開会の挨拶に続き、只野教授は「民主主義のいま」というテーマで講演。選挙において問われる「民



意について考察した。現在の日本の議員選挙においては、若者を中心とする「投票率の低さ」や、議員1人が代表する人口（有権者数）の格差による「投票価値の不均衡」、女性議員の少なさ（世界平均の女性議員比率は下院が22・8%、上院が22・0%であるのに対し、日本の女性議員比率は衆議院が9・5%で191か国中155位（2016年6月現在）、参議院が20・7%（同7月現在）などさまざまな問題がある。これらの諸問題をどうとらえればいいのか、考える機会を提供。最後に、選挙の重要性和選挙の限界に触れて結びとした。

「平和主義のいま」

次に、山内敏弘名誉教授が「平和主義のいま」について講演した。まず、昨年成立した安保関連法の概要を説明したうえで、日本を取り巻く安保環境の変化など政府が安保法制を必要とする理由や「存立危機事態」における武力行使を合憲とする政府の根拠付けなどを解説した。そのうえで、集団的自衛権の行使は、憲法9条の下では容認できないとする見解が学説上は大多数であることなどを紹介するとともに、かりに安全保障環境の変化によって集団的自衛権の行使が必要だと考えたとしても、そのためには、憲法96条の憲法改正手続を踏むことが立憲主義の観点から必要だと述べた。さらに、9条の改憲論議に関して、改憲賛成論と反対論の内容や論拠をそれぞれ解説した。そ



平成28年度一橋大学春季公開講座「憲法のいま」

プログラム

開会挨拶	いま、憲法を考える意味／只野雅人 一橋大学法学研究科教授
講演	民主主義のいま／只野雅人 一橋大学法学研究科教授
	平和主義のいま／山内敏弘 一橋大学名誉教授
	表現の自由のいま／阪口正二郎 一橋大学法学研究科教授
	裁判のいま／村岡啓一 白鷗大学法科大学院教授
	最高裁判所のいま／渡辺康行 一橋大学法学研究科教授
全体討論、質疑	司会：只野雅人 一橋大学法学研究科教授

日時：2016年6月4日(土) 14:00～17:00
 場所：一橋大学国立西キャンパス 本館21番教室
 主催：国立大学法人一橋大学
 後援：国立市、小平市、立川市、国分寺市、
 府中市、武蔵村山市各教育委員会

して、近年の世論調査では改憲反対論が多数であることを踏まえて、いま重要なのは、東北アジアの非核地帯化など、9条を活かす具体的な政策を推進することであると指摘した。

「表現の自由のいま」

3番目は、法学研究科の阪口正二郎教授が「表現の自由のいま」を講演。憲法における「表現の自由」の意味について触れた後、「印刷メディアは自由に、放送メディアは規制する」といった規制の二極化や、伝統的な規制根拠とその衰退、部分的規制論など規制の在り方について説明した。さらに、メディアに求められる対応や政府の規制権限の濫用の問題、総務大臣が放送局に電波停止を命じる可能性に言及した問題に関して、政府が



ら独立した規制機関が欠如しているという懸念材料などについても言及した。

「裁判のいま」

休憩を挟み、白鷗大学法科大学院の村岡啓一教授が「裁判のいま」について講演。村岡教授は1974年に一橋大学法学部を卒業、司法試験に合格し弁護士



士として活躍。2001年に一橋大学大学院法学研究科博士課程修了、博士(法学)を取得後、一橋大学法学研究科教授、法学研究科長、法科大学院長に就任するなど本学に関わりの深い存在である。講演では、特定の事件を素材にして、裁判の場で憲法を武器に憲法価値を具体的に実現する内容の司法判断を得るための「憲法訴訟」の現状について説明があった。憲法訴訟の裏側や最高裁判所のスタンス、憲法判断の方法といった一般にはうかがい知れない話や、一般にも注目された「再婚禁止期間違憲訴訟判決」、「夫婦別姓訴訟判決」など最近の最高裁判決の

評価を聞くことができた。そして、「憲法の価値を実現するためには、政治部門の積極的対応が必要であり、憲法秩序の形成には国民の側の政治参加と、日々の暮らしの中での憲法価値の追求が決定的に重要」と結論つけた。

「最高裁判所のいま」

講演の最後は、法学研究科の渡辺康行教授による「最高裁判所のいま」。まず、最高裁判所の豆知識として、衆議院議員選挙の際に行われる国民審査の概要、大法院と小法院の仕事の分担、最高裁の判決における意



見の表示制度、最高裁調査官の概要、司法行政事務の内容といった基礎を解説。さらに、渡辺教授が裁判官の研究のために行った前・最高裁判所判事の泉徳治氏へのインタビュー結果を通じて、最高裁判所の70年の歴史や裁判官研究の面白さなどについて

て、親しみやすく紹介した。

再び休憩を挟み、質疑及び全体討論に入った。それぞれの講演には多くの質疑が寄せられ、各講演者がいくつかをピックアップして応答。限られた時間の講演内容をより深めることができた。さらに時間の許す限り、それぞれの持論などを述べて閉幕した。





ソニヤ・デール
社会学研究科特任講師



中野聡
社会学部長・社会学研究科長



アプリル・ヘイ松井
愛知県立大学教養教育センター准教授



英語で日本を研究する。

社会学部・社会学研究科主催の 英語によるレクチャーシリーズが始まりました

2016年7月1日(金) 一橋大学東キャンパス第三研究館にて、

第2回「Hitotsubashi University Japanese Studies in English Lecture Series」が開催された。

今回のテーマは、“BLACK WOMEN IN JAPAN: Experiences and Perceptions”。

スピーカーは、アプリル・ヘイ松井氏。現在、愛知県立大学教養教育センターで准教授として教鞭を執る傍ら、

日本に住む黒人女性のための団体を創設し運営に関わっている。

会場は、50人を超えるグローバルな聴衆で溢れた。

**一般市民向け、英語のみの
レクチャーシリーズ
社会学部・社会学研究科の
新しい試み**

2016年度より社会学研究科では、英語のみで行うレクチャーシリーズ「Japanese Studies in English Lecture Series」を開催することになった。これまで社会学研究科では、10年にわたり連続市民講座を開催してきたが、そのいずれもが日本人の聴衆を想定したものであった。一方このレクチャーシリーズは、日本人に加え、日本に住む一般の外国人、あるいは日本に関心を持つ外国人研究者をも想定している。社会学、言語、ジェンダー、美術、映像といった切り口から、英語で日本研究を行うという試みである。

同レクチャーシリーズのコーディネーターを務めるのは、社会学研究科に所属するソニヤ・デール特任講師。本年度は全5回のレクチャーシリーズを計画しているという。題材として日本を取り上げることについてデール講師は、「このレクチャーシリーズの開催には大きく分けて二つの目的があります。一つは、日本を研究対象に、さまざまな角度から考察し、それを英語でレクチャーすること。またこのレクチャーシリーズが日本人と日本に住む外国人または日本に関心を持つ外国人の、交流と情報交換の場になれば素晴らしいと

思います。今年度のレクチャーシリーズの共通テーマは、「Perception」(視点、モノの見方・見られ方)です。レクチャーはすべて英語で行い、通訳も付けていません。この機会を新たな視点を学ぶ場、英語でのコミュニケーションに慣れる場にしていただければと思います。またこの活動が社会学研究科のグローバル化に弾みをつけるきっかけとなれば良いと思っています。できるだけ多くの方に気軽に参加していただきたいですね」と、レクチャーシリーズへの思いを語る。

**偏ったイメージと実際の自分
とのギャップに困惑する
日本で生活する黒人女性たち**

レクチャーシリーズの第2回の講師を務めた愛知県立大学教養教育センター准教授のアプリル・ヘイ松井氏は、イギリス出身。在日は今年で20年目を迎える。日本で生活を始めて以来、黒人女性が社会的マイノリティであることを日々痛感させられていると松井氏は語った。冒頭に松井氏は、多くの日本人が持つ黒人女性に対するイメージについて語った。松井氏の調査によると、日本人が持つ黒人女性のイメージは、①音楽的、②高い運動能力、③大柄、④セクシー、⑤攻撃的というものがトップ5に挙がったという。しかし、当たり前前のことながら、これらのイメージがすべての黒人女性に共通する特徴であ



第2回「Hitotsubashi University Japanese Studies in English Lecture Series」 “BLACK WOMEN IN JAPAN: Experiences and Perceptions”

講演「日本にいる黒人女性—経験と認知」 アプリル・ヘイ松井 愛知県立大学教養教育センター准教授

挨拶 中野聡 社会学部長・社会学研究科長

司会・コーディネーター ソニヤ・デール 社会学研究科特任講師

日時：2016年7月1日（金）17：30～19：00

言語：英語（通訳なし）

場所：一橋大学東キャンパス 第三研究館3階

*参加費無料。誰でも参加可能。

日本に住む黒人女性たちへの インタビューを通して 見えてきた、違和感と幸福感

自文化で暮らす人にとって至極日常的な習慣や言動が、時として外国人に大きな違和感を与えることがある。そのことについて松井氏は、年齢、出身国、職業、在日期间、日本での居住地が異なる黒人女性11人の証言をもとに、彼女たちが経験した社会的違和感について紹介した。ガンビア出身のある女性、日本の病院で言われた一言に、やり場のない、複雑な気持ちになったという。日本で医療が受けられることの

幸運を医療スタッフとの何気ない会話の中で論じられたからだ。確かに日本は世界有数の医療先進国であり、その事実には疑い余地はない。しかし医療サービスという一点だけを挙げて、自国で暮らす女性たちに比べて自分が幸運であると他者から言われたことは心外だったという。また別の女性は、子どもたちが学校でお絵描きをする際に使う日本のクレヨンに、「はだいろ」という色の種類があったことに驚いたという。その色は自分たちが持つ肌の色とは明らかに異なっていたからだ。また日本生まれ育った我が子が日本人らしく振る舞うことに、自文化が失われていく危機を感じた女性もいた。また、ある女性は公園で自分の子どもを遊ばせていた時、日本人の親子が自分たちを見て立ち去る姿を目の当たりにし、心が傷ついたという。このように日本に住む黒人女性たちは、自分たちが明らかに「違う存在」であることを突きつけられながら日々の生活を送っている、と松井氏は語る。しかしながら、そうした日本人の行為や態度は、いわゆる人種差別によるものとは少し性質が異なるとも松井氏は語った。なぜなら、日本では身の危険を伴う排他性を感じることはほとんどないからである。黒人女性たちの多くは、日本での安全な生活には満足しているという。さらに近年のグローバル化の影響もあり、日本人の黒人に対する理解も進んでき

ていると松井氏は感じている。「時には憤りを感じながらも今の生活を楽しんでいる」というメッセージで、松井氏は講演を締めくくった。

質疑応答こそ盛り上がる グローバルの雰囲気 そこにある

こうして1時間にわたる松井氏の講演は終了し、質疑応答の時間を迎えた。聴衆のほとんどが外国人だったからなのか、次から次へと松井氏への質問が寄せられた。一部には質疑の範囲を超えて、自身が日本に持った違和感について語る人もいた。こうして1時間30分にわたる松井氏のレクチャーは、大盛況のうちに幕を閉じ、議論はその後に予定されていた交流会へと持ち越されていったのだ。

今後のレクチャーシリーズ

日程：2016年10月14日（金）
講師：スヴェン・サーラ 上智大学国際教養学部准教授
分野：歴史学、政治学

日程：2016年11月15日（火）
講師：中村桃子 関東学院大学経済学部教授
分野：言語学、ジェンダー・スタディーズ

日程：2017年1月（日程未定）
講師：ジェニファー・コーツ 京都大学白眉センター助教
分野：映画学

*詳細については、ホームページで随時更新予定

<http://www.soc.hit-u.ac.jp/info/pub/>

理論と応用を架橋する数理モデルの開発。 そこに金融工学に携わる醍醐味がある



金融商品のプライシングやリスク管理に 用いられる、数理的手法の研究

私の専門分野は、確率数値解析及び数理ファイナンス・金融工学です。具体的には、金融商品のプライシングや金融機関のリスク管理に用いる数理的手法の研究を行っています。特に、マリアバン解析と呼ばれる「無限次元空間上の確率解析（ブラウン運動の汎関数に対する微積分学）」を用いた数値計算手法のファイナンスへの応用が専門です。現在、私はその無限次元空間上の確率解析を用いて、複雑な金融商品やリスク量を高精度に離散近似する「確率微分方程式の高次離散化法」などの研究を行っています。

これによって複雑な対象をより効率的に評価することが可能になります。すると、金融の現象を表現する数理モデルが複雑になっても、極力コストのかからない方法でプライスやリスク量を見積もることができます。また、簡易な方法によって、現在の金融マーケットの状態に整合するようにモデルのパラメータを決めることも可能になります。ま

だ途中の段階ですが、応用の利く興味深い結果が出てくれることを期待しながら、試行錯誤して日々の研究に取り組んでいます。

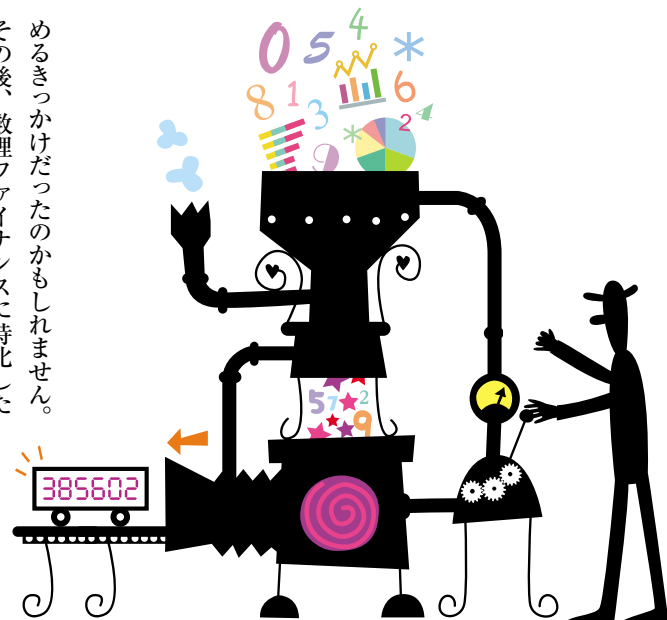
「実社会で使える理論」の重要性に気づき、

修士課程修了後

金融工学の研究所に就職

私はかつて6年ほど、金融機関で研究員として実務に携わっていました。金融は、実社会と密接に関係しているもの。実社会に身を置いてみないと優れた研究に結びつかないのではないかと感じていたからです。

学部生時代、私は立命館大学でファイナンスを専攻していましたが、その傍ら理工学部の数学科の授業や確率論研究室のゼミにも参加していました。もともと現代社会の問題を数理モデルで考えたいといった類いの話や解析学が好きで、大学に行ったら経済・ファイナンスを数理的に解析したいと考えていました。確率論の分野では、京都大学の伊藤清先生（故人）が第一人者とされていますが、当時の確率論研究室には伊藤先生の「お弟子さん」やその流れを汲む先生が多くいらして、とても熱意があり、その環境で伊藤解析の基礎となる確率論の勉強にのめり込んでいったのです。また、当時立命館大学で開催された確率論・数理ファイナンスの国際学会に参加し、世界的に有名な数学者や数理ファイナンスの若手研究者の講演を聞く機会もありました。当時は、講演内容等は全然分かりませんでしたが、自分が勉強している確率論やファイナンスに関わる数学がとても生き生きしているように感じ、刺激を受けたことを覚えています。学部生時代のこれらの経験が現在の研究を始



めるきっかけだったのかもしれませんが。その後、数理ファイナンスに特化した研究を行いたいと思い、東京大学の経済学研究科（修士課程）に進み、数理ファイナンスの研究室でファイナンスに使う数学や特に確率解析の勉強をしていました。修士の時は怒られた記憶はありませんが、その研究室の先生との出会いが私の人生の転機になりました。先生はさまざまな研究実績を持っていらっしゃいましたが、何よりもバリバリの実務家としても活躍されていた方だったのです。修士時代、小難しいことを追求していた私に、先生は「実社会で使えなければ意味がない」と厳しく指摘してくださいました。ほとんど叱責に近かったです（笑）。私自身も「実社会に出てみないと、研究を深められないのではないかと感じるようになりました。」

就職活動では、銀行や証券会社のフィナンシャルエンジニアコースやシンクタンクなどを回りました。最終的に、インターンシップに参加した三菱UFJフィナンシャル・グループの金融工学関連のモデル開発などを行う「三菱UFJトラスト投資工学研究所」（MTEC）に入社。研究員として働き始めました。入社した2009年は、前年の

リーマンショック（金融危機）の直後。そのような時期に入社して（一橋大学に赴任するまで）6年ほど仕事をしていたので、図らずも「金融危機後の金融工学」にどっぷり関わることになったのです。MTECにはさまざまな能力を持った研究員がおり、とても刺激的な環境でした。ここでの6年間は自分の研究の方向性を決めるうえでとても有意義なものだったと思います。

金融危機後の金融工学に携わりながら 新しい数理モデルの研究・開発を志向

「金融危機後の金融工学」に関わって分かったのは、金融の数理モデルの枠組みづくりとそれを解析する確率論など数学理論の重要性です。もちろん金融危機前から重要ではあったのですが、金融危機では既存の枠組みから逸脱したことが顕著に見られたので、金融危機後は「新しく理論を整備しなければならない」ということが言われるようになりました。金融商品の評価、リスク管理、当局の規制への各金融機関の諸対応など、さまざまな面において大きな転換点だったと言えるでしょう。

ただ、金融の状況によって理論が変化しうるのは金融が「動いている」ことを意味するものであり、このことは金融工学あるいは数理ファイナンスの研究を行う者にとって醍醐味でもあります。実社会のビジネスでは、取引相手がいて何らかの商品にプライシングをして売買を行います。たとえば、OTC（オーバー・ザ・カウンター）と言われるマーケットではリスクをヘッジ（回避）するためのデリバティブ商品が相対で取引されます。そこに金融危機のような大きな波が襲ってくると、売り手・買い手いずれかの倒産によって将来得られるであろう「儲け」が飛びリスクがあるわけです。そのようなリスクも考慮した新しいプライスを見ていこう、というのが金融危機以後の流れです。言い換えると、そのようなリスクを考慮しなかったことも、当時の金融機関などが損を被ったり倒産したりした一因な

わけです。リスクをしつかり見ていこうというのは現在の金融マーケット全体の流れでもありますし、当局の規制も金融危機後にどんどん入ってきて、今なおさまざまな新しいルールがつくられています。そのような金融の状況の変化に対して、適切な数理モデルを提供し、そしてそれを解析するためのツールを与えることも我々アカデミックの重要な役割です。実社会に身を置いてみなければ、分からなかったことだと思っています。

私は入社後も修士時代にお世話になった先生と共同で研究を行っていたこともあり、入社4年目から働きながら博士課程（東京大学・経済学研究科）で研究を進めるという幸運にも恵まれました。その環境下で私が取り組んだのは、金融危機後の数理モデルを解析するための数値計算法の研究です。高度な専門知識を要するので具体的な説明は割愛しますが、私の目標をシンプルに表現すると、「自販機で缶ジュースを買うように、ボタンを押すと数理モデルの内部が効率的かつ適切に動いてプライスやリスク量などの見積もりがポンと出てくる」ということでしょうか。

金融危機後は、数理モデルに取り入れるべき要素が格段に増え、複雑化しました。複雑な現実に合わせてしようとすると、数理モデルはどこまでも複雑になります。しかし一方で、いくら複雑なモデルを考えても、『実社会で使えなければ意味がない』のです。金融の実務では、現実を表現するモデルを考えると複雑になりすぎて解けなくなり、結局簡単に計算できる簡単なモデルに置き換えることがよくあります。ただ、それではモデルから出るアウトプットに意味がなくなります。私の目標は、現実を表現するモデルが複雑になってもボタンを押せば簡単に計算できるロジックを構築することです。金融マーケットという実社会で、金融のプロの方々が極力「簡単に」「適切に」「高速で」「効率的に」金融商品のプライスやリスク量の見積もりができる。そんな実社会への応用と理論を架橋する数理モデルを開発したいと思っています。私の研究における最大のモチベーションは、そこにあります。

ファイナンスは社会科学。理論と応用の 両方にしっかりと目を配る必要がある

一橋大学には、経済学研究科に限らず、商学、ICSなどさまざまな研究科にファイナンスの研究者がいらついています。そして横のつながりがとてもしっかりしていて、実際にインフォーマルなセミナーや集会などを通して、研究者の方々と一緒に学ぶ機会もあります。研究自体は自分で突きつめていかなければなりません、その過程でほかの研究者の方々に自分の考えを伝えたり、ヒントをいただいたりすることは極めて重要です。その意味では、整った環境の中で研究が進められるので、ありがたい限りです。

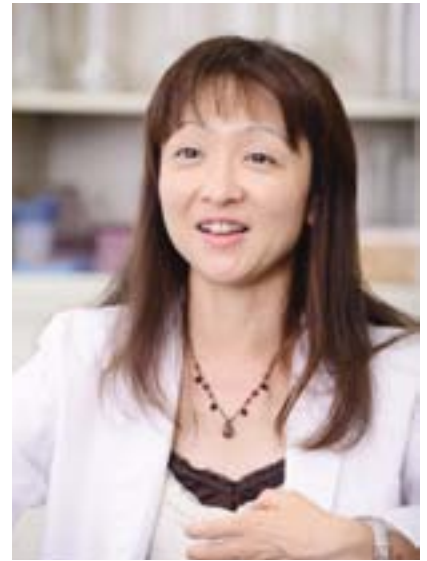
一方で、私は教員として学生の方々と接しています。ゼミで学生に伝えているのは、「研究対象に『ファイナンス』という言葉が付いている以上は応用ありき。つねに実社会への応用にも目を向けましょう」ということです。数理ファイナンスではかなり高度な数学を使うことがありますが、ファイナンスは自然科学ではなく、社会科学です。社会科学を学びや研究の対象にしているわけですから、「現実社会で何が起きているか」というモチベーションは忘れないようにしてほしいと思います。同時に、私のゼミや講義で学ぶ以上は、実務にばかり思いをはせるのではなく、理論もしっかり学んでもらうつもりです。一見何の役に立つかわからないような理論を学ぶこともとても重要です。理論と応用、双方を学ぶことは、実社会に出た時に絶対役に立つプラスにしかならない。私はそう確信しています。（談）

経済学研究科講師
（数理ファイナンス、
確率数値解析）
経済学博士（東京大学）

山田俊皓

（やまだ・としひろ）

2007年立命館大学経済学部文理総合インスティテュート（ファイナンス）卒。2009年東京大学大学院経済学研究科金融システム専攻修士課程修了。2009年4月～2015年2月三菱UFJトラスト投資工学研究所（MTEC）研究員。2015年3月より一橋大学大学院経済学研究科経済統計部門講師。2015年3月東京大学大学院経済学研究科金融システム専攻博士課程修了。研究テーマは、確率解析を用いた数値計算法の開発とそのファイナンスへの応用。



(環境科学実験室にて撮影)

生活で使用する水の実態調査と スマートメータの インターフェース及び計測技術の開発

私は水と人との関わりを中心に、環境に関連する研究を行っています。特に「水」を切り口として、生活の中でどのように・どのくらいの量の水を使っているのか、その行動はどのようにして決まっているのか、国内外を対象に、さまざまなアプローチを行っています。現在の具体的な研究テーマは、大きく二つ。生活の中で使用する水の実態調査と、スマートメータのインターフェース及び計測技術の開発です。

まず生活の中で使用する水の実態調査ですが、家庭における用途別の水使用量（トイレ、洗濯、シャワー等、日常生活で使用する用途毎の水使用量）の実測や、使用行動、意識などについて調査を行っています。これまでは、タイ（チェーンマイ、コンケン）、ベトナム（ハノイ）で研究を行ってきました。調査のプロセスで、スマートメータのアイデアが生まれたのですが、それは後

文理を超えた新しい知見を見出したい

述します。

スマートメータ研究は、各家庭の水使用量をどのように「見える化」すると水使用行動が変化するのか？ということを探るものですが、それと同時に計測技術の開発研究も進めています。

「水リテラシー」を通して

豊かで快適な生活の可能性を探る

水使用の実態調査については、先述のようにタイやベトナムで計測を行い、研究を重ねています。アジアの国々では、水道が普及していません。水道があっても限られた時間しか水が出ない地域が多いのが実情です。水のインフラを整備するには、どれくらいの質の水を、どれくらいの量用意したらいいかを把握し、施設整備や水源確保を考える必要があります。そのための基礎データをとることがこの研究の目的の一つです。

しかし、すべての地域に、今われわれが東京で使っているようなインフラを導入することは難しいだけでなく、必要なことではありません。むしろ、現在の東京では失われてしまった、用途によって水の質や量を使い分けるシステム——たとえば洗濯水には雨水^{うすい}を使うなど——は積極的に活かしていくことが重要です。実はそのほうがむしろ先進的である、と私は考えています。

「水のシステム」＝水道による水のシステム」というスキームを変え、地域にあったやり方こそが豊かなシステムである、ということを示すべく「水リテラシー」という概念を提案しました。水を使う人間の意識や行動も含めた水システムをうまく動かしていくには水リテラシーが必須で、豊かな

「水リテラシー」がなければ地域にあった多様なやり方は成り立ちません。

人間は誰でも、豊かで快適な生活をしたと思うものです。この研究が、「地域の特性にあったシステムこそが豊かで快適なもの」という社会にしていくための礎になれば、と私は考えています。

スマートメータによる

使用量の「見える化」は

水を使う人の行動をどう変えるのか

夢はとても大きいのですが、水使用の実態調査自体はとても地道なものです。用途毎の蛇口に計測機器を取り付けて、水の量を測って、計測機器を取り外して……ということを延々と繰り返して、データを積み重ねていくわけです。このプロセスやデータをもっと有効に使えないだろうか、という思いの中から「スマートメータ」という発想が出てきました。

電気のスマートメータはすでに多くの人が知っていて、一般家庭への普及も進んでいます。家の中の場所、どの家電を使っているか、消費量はどれくらいかが簡単に分かり、節電にも家計の節約にもつながるシステムです。

結論から言えば、現段階では水で同じシステムをつくるのは技術的に難しいです。家の中のどの蛇口からどのくらいの量の水が出ているか、ということを実際にはとても難しいことです。簡単そうでは実はとても難しいのです。

そこで、スマートメータ本体の開発を目指しながら、スマートメータのインターフェースについて研究を進めることにしました。つまり、どの

くらい水を使っているのかという情報を、どのような方法で使用者に「見える化」すると、水の使い方に変化が生じるのか（あるいは生じないのか）を調べる研究です。

使用量を測る機器が、目の届く範囲に置かれていたらどうなるか。水を流すとどんどんメータが回る様子を見たら、人はどう思うか。それは、最初の数日間と2か月後では、同じなのか、変化していくものなのか——。情報のプレゼンテーションが水の使い方に与える影響を観察し、その時の水資源状況に合わせた行動につながる最適なインターフェースを考えていくわけです。この研究は、工学、認知科学、科学技術社会論の研究者とともに、まさに文系・理系の境界をまたぐコラボレーションとなっています。

**文理の枠を超えた研究や
交流ができる一橋大生が
とても羨ましいし、期待もしています**

一橋大学という環境は、私の研究にとって不可欠なものです。たとえば海外で水使用の実態調査をする場合、現地の大学や研究機関との連携が必要になります。一橋大学には、フィリピン、スリランカ、中南米など、さまざまな地域の研究をされている先生方がたくさんいらっしゃいます。伝手やつながりを活かせるという意味で、とても助かっています。何よりも、私の研究を面白がって、「一緒にやりたいですね」と関心を示してくださることが嬉しいです。

水スマートメータの開発についても同じことが

「水」を切り口に、

言えます。この研究には、計測技術だけではなくマーケティング、行動経済学、認知心理学などの知見が重要になってきます。一橋大学はこれらの領域で最先端の研究がなされているので、先生方はもちろん、学生の皆さんからも新しいヒントを得ることが多いのです。特にビジネスモデルやスキームのアイデアは、私よりも学生のほうが豊富に持っていますね。

たとえば最近注目を浴びている「水ビジネス」について、私が提供できるのは主に水処理技術に関する情報です。一方で学生からは、「途上国で水ビジネスを成立させるなら最適なモデルは……」「料金の徴収方法は……」「行政・専門家・市民が担う役割は……」などのアイデアが出てきます。着眼点が違うので、お互いに情報交換しつつ文理の



枠を超えて学びあうことのできる、素晴らしい環境だと思っています。

文理の枠を超えろという意味ではもう一つ、お茶の水女子大学・環境工学研究室との合同ゼミという取り組みを行っています。これは「環境」や「水」について違うアプローチをしている学生間の交流を通して、さまざまな力を身につけていくための試みです。自分の研究について異分野の人に分かりやすく説明する力。相手の専門領域をある程度理解したうえでディスカッションする力。そして、多様性を受容する力——。こういう力は企業で働くうえで重要ですし、一橋大学の学生にこそ身につけてほしい力です。事前の勉強会では「難しい……」とつぶやいていた学生たちですが、フタを開けたら、いつも学内で行っているゼミとは違う角度からの鋭い質問やディスカッションができて、お互いに大きな成果を得られた実感があります。

学生時代から、文理の枠を超えた研究や交流ができる。そんな一橋大生を羨ましいと思いますし、将来的には企業人としても研究者としても、もっともっと良いものを生み出してくれるはず、と期待しています。（談）

社会学研究科教授 大瀧友里奈（おおたき・ゆりな）

学際情報学博士。東京大学工学部都市工学科卒。同大学大学院工学系研究科都市工学専攻修士課程修了後、日本たばこ産業株式会社入社。社会人経験を経て東京大学大学院学際情報学府修士課程、同博士課程修了。東京大学大学院総合教育研究センター特任助教、准教授を経て、一橋大学大学院社会学研究科准教授に就任。のち同教授に就任、現在に至る。主な著書にPetri S. Juuti, Tapio S. Katko & Heikki S. Vuorinen (ed.) Environmental History of Water-Global views on community water supply and sanitation (co-author), IWA Publishingがある。



『ヨーロッパ 時空の交差点』
大月康弘／著 創文社刊
定価：本体2,000円＋税
2015年12月発行

2016年6月24日、一橋大学附属図書館で著者が自著を語るイベント「ブックトーク」が開催された。100人近い聴衆が集まり、会場の空気は開始前から熱気に包まれていた。講演者は大月康弘経済学研究科教授。数々の美しい写真を添え、著書『ヨーロッパ 時空の交差点』の内容をふまえた講演が行われた。

折しも当日は、イギリスのEU離脱の是非を問う国民投票の開票日。西洋史・経済社会構造分析の専門家による熱の籠った語りは、聴衆に「ヨーロッパとは何か」を問い直すものであった。『HQ』では、当日の講演内容をその「熱」とともにお届けしたい。

一橋大学附属図書館ブックトーク

ヨーロッパ 時空の交差点

— 場所に学ぶ、書物に学ぶ、その作法 —

経済学研究科 教授 大月康弘

【ブックトーク】 ブックトークとは、あるテーマに沿って講師が自著を紹介し、「読んでみよう」という意欲を引き出すイベントです。一橋大学附属図書館では、読書推進活動の一環として、“著者が語るだけでなく、著者と参加者との交流の場をつくり、著作への深い理解とコミュニケーションを生み出すこと”を目的としてブックトークを開催しています。



過去のブックトークの様子 ▶ <http://www.lib.hit-u.ac.jp/pr/reading/booktalk/>

英国での国民投票の日に

ブックトーク当日は、英国がEUから離脱するか否かの国民投票の結果が判明する日でした。結果は、僅差で「離脱」派の勝利。聴衆の皆さんも、アクチュアルなヨーロッパ情勢に強い関心を寄せておられたようでした。

私は、ヨーロッパにおける現在進行形の種々の動きに言及しながら、拙著がお伝えしたい目論見についてお話ししました。

た。それは、英国のEU離脱で派生するだろうスコットランドほかの「分裂」とその含意（この時点では動きはまだ顕在化していなかった）、EUという超国家的装置を志向した歴史の水脈、等々、いわば「ヨーロッパ世界の見方」に関わることでした。

ヨーロッパ文明への関心

当日参集くださった皆さんからは、事前に多くの質問が寄せられました。たと

えばこうです。

「ポール・ヴァレリーは、評論『精神の危機』において、ヨーロッパの特別な価値を強調しました—ヨーロッパは、人間的見地から見ても、ほかとは根本的に区別される一地域だ。ヨーロッパ人、ヨーロッパの精神こそ驚異的な人類の夢の実現の立役者だ—。ヴァレリーのヨーロッパ観は正しいのでしょうか。しかしながら、ヴァレリーは、ヨーロッパの光を支えた地域と人々の歴史を配慮していないように思われます。ヨーロッパ人による世界各地の征服、殺戮、収奪、人間狩りなど。それらの多くは今も修復されていないし、深刻な矛盾としてヨーロッパを襲い続けるのではないのでしょうか。」

折しも、シリア地域からの難民も多く発生しています。昨年十一月一日にはパリで凄惨なテロ事件も発生しました（「金曜日の大虐殺」）。

私の「旅」は、パリからイタリア、バルカンを通じてコンスタンティノープル、小アジア、シリア、パレスティナへと至るものでしたが、今やこの街道を、多くの難民が西進したのです。

ヨーロッパ世界が非ヨーロッパ圏に遺した負の影響（サイクス・ピコ協定、フサイン・マクマホン協定、バルフォア宣言の矛盾、等）。そのリフレクシオンが顕在化している、と観る識者も少なくありません。

対応に苦慮するアクチュアルなヨーロッパ事情にも関わり、ヨーロッパ文明の本質を衝く質問にもお答えできるような、小著の内容をふまえながらお話ししました（難民は、もとよりシリアからだけではありません。サブサハラから北アフリカを北上して南欧に入る人たちも多くのいることに注意が必要です）。

本書の性格と構成について

この本は、研究書ではありません。いわば「旅」の途上での随想をまとめたエッセイ集です。といって、一般に想起



ノートルダム・ド・パリと広場のシャルルマーニュ騎馬像。ここから「旅」が始まる



「旅」の寄港地、ハギア・ソフィア聖堂（イスタンブル）



ノートルダム・ド・パリのガーゴイルと眼下に広がるホテル・デュ（病院）の威容



ハギア・ソフィア聖堂内陣。ドームの高さは55mを超える

される旅の思い出、印象記の類でもありません。歴史や古典籍にまつわることも、簡潔に（一定字数で）語るスタイルを取っています。というのも、本書は、法律・法制史・政治学・経済学など社会科学系の専門書を刊行する学術出版社の月刊（現在は季刊）PR誌に書いた巻頭掲載コラムを集成したものだからです。

この雑誌が想定する読者は、専門書・学術書を書く「ヨーロッパや中国の古典籍に通暁する人」です。つまり、学問世界の玄人に、普段の研究作業から離れて（専門領域から離れて）、いつとき「旅」をしてもらうための読み物として書かれました。

古典や歴史事情に通じた読者を想定した本書ですが、他方で、古典や学問への誘いをも兼ねているつもりです。

著者が歩んできた旅先には限りがありますが、結局のところ、ヨーロッパから地中海のほりを巡り、訪れた土地での随想をまとめたものとなっています。広大な空間を経巡る「旅」は、まだ途上なのです。

著者の専門は「西洋史」、また「ヨーロッパ」をベースにした経済社会構造分析です。この立脚点から、六四編の文章を収録しました。「ヨーロッパとは何か」「ビザンツとは何か」といった解説は一

切していません。ある人に言わせると、エッセイというよりボエムに近い、とのこと。……そうかもしれません（笑）。

ビザンツ（＝東地中海世界）関連の地名、人名が多く登場します。その限りで、西北ヨーロッパ中心で「ヨーロッパ」を理解することに慣れた皆さんは、この「旅」に困難を覚えるかもしれません。ただ、各文に写真を添えて、イメージ喚起に努めました。巻末に詳細な地名・人名索引、六枚の地図も備えましたから、理解は容易に得られるでしょう。

ヨーロッパ論——その視点の取り方

ビザンツ研究者の著書だけに、一つひとつの文章がモザイク画を構成する一片の石（テッセラ）のようになれば、と願いました。それぞれの文章で紹介される「知識」はわずかなものです。いずれも歴史の断片にすぎません。ただ、各文で伝えたいことは、相互に絡み合っています。皆さんの頭の中で総合してもらえば、相応の専門的知識とともに、お伝えしたい知的座標軸を共有していただけるはずです。

狙いは、これまで「ヨーロッパ史」の文脈で看過され気味だったビザンツに観察視点を置いて、同じ舞台（ヨーロッパ史）の役者や背景に、新しい角度から光

ハギア・ソフィア聖堂には多くのモザイク画が残る。
右：帝都を捧げるコンスタンティヌス帝、左：ハギア・ソフィア聖堂を捧げるユスティニアヌス帝



大地の相貌① ヘリコン山麓、オシオス・ルカス聖堂への道（ギリシャ共和国ヴィオティア県）



大地の相貌② アギオス・ニコラオス聖堂（ギリシャ共和国キクラデス県ナクソス島サグリ）



を当ててみる。その「異化作用」Verfremdungを期待しました。

皆さんが本書を手に取り、アトランダムであれ各文を読んでくだされば、読後には、また違った「ヨーロッパ観」をお持ちになれることでしょう。「あとがき」で「学ぶとは自分のなかで何かが変わる

こと」という上原専祿先生（一八九九—一九七五）の言を引きました。まさに私自身が、この一橋大学で得させてもらった経験です。本書が、そういった経験の一助にもなれば望外のことと思います。

「ヨーロッパ」の捉え方

ヨーロッパ世界の版図をどう考えるか。ヨーロッパを「ヨーロッパ」たらしめる本質とは何か。この難問に取り組み、近代ヨーロッパが到達した普遍的価値

としての道徳哲学、政治学、経済学、等々の公準（人文・社会科学系の学問）を学ぶ。それは、一橋大学における勉学の大きな目標です。

私たちの「ヨーロッパ理解」は、非ヨーロッパ世界へのそれら公準の適用に当

たっても重要な知的作業となるでしょう（たとえば開発支援のあり方）。非ヨーロッパ世界の文化（価値観、行動原則、等）を深く理解するとともに、「近代ヨーロッパ」それ自体への歴史的考察が求められているのです。

私たちは、近代

ヨーロッパで育まれた人文・社会科学の歴史的品格について理解しなければなりません。そのために、

①「前近代ヨーロッパ」の経済社会構造、また②非ヨーロッパ

世界各地の「伝統社会」分析が要請されています。三浦新七

先生（一八七七—一九四七）以来の

「文明史」講義、また上原専祿先生が構想された社会学部の学科編成は、まさにこのような見取り図を示すものでした。

ホッブス『リヴァイアサン』を改めて手に取りましょう。近代国家が「リヴァイアサン」であることはもちろん、「前

近代」における「リヴァイアサン」として「キリスト教会」が想定されています。避けがたいリヴァイアサン（国家）の有り様を見極めようとする古典の傍らで、私たちは、「前近代」（＝教会国家）から「近代」（＝世俗国家）への転回過程とは何だったか、と問うてみることも必要でしょう。

それは、近代的価値である「自由」Libertas、「平等」Egalitas、「博愛」Fraternitasの起源を考える「旅」となるはずです。これも、また本書のテーマでした。

「社会科学」の作法とその歴史性

私は、本学で、多くの先生方から「近代社会科学」の方法と分析の実際について教えてもらいました。それは、①「近代社会」の構成とその歴史的来歴、②「市民社会」の性格とその起源、③「資本主義」の仕組みとその原理的淵源、を考える「旅」でした。各科ともに深化された方法論を備え、時にしんどい勉強でしたが、全体として「近代の作法」を見極める術を伝授いただいた、と感謝しています。

私が現在「経済史」の専門家としてあるのは、一連の勉学とともに、歴史学の諸先生から、「時間」、及び時間軸に沿って考えること、の重要性を教えていただいたからでした。特に、経済や社会の構造を見通すうえで有効な「時間の三層構



神々の宿り② メテオラの修道院（ギリシャ共和国テッサリア地方）



神々の宿り① ナクソス島のアポロン神殿址



リヨンもまた学ぶべき場所の一つ。16世紀に花開いたルネサンスは、イタリア人とギリシャ文化の息吹が及んだ最前線だった

造」というものには、目を見開かされました。

『ブローデル（一九〇二―八五）の『地中海』La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe

II, 2 tomes, Paris, 1949.（藤原書店刊、二〇〇四年）なども、覚束ないフランス語力のまま^{ひたひた}読みました。

アルジェリアで「地中海」に出合い、歴史学の方法を刷新したブローデル。

一九世紀ドイツ型の政治史がなお主流だった時代。第二次世界大戦の捕虜となるなかで、H・ピレンヌ（一八六二―一九三五）『ヨーロッパ世界の誕生』（創

文社刊、一九六〇年）の衣鉢を継ぎ、構

想した『地中海』。

彼は、従来の政治史を「出来事」
événementsの歴史と呼んで、経済社会を分析する視角として、「長期持続」conjoncture/
la longue durée、また「構造」structure

という概念を提出しました。いわゆる構造主義 structuralisme に連なる系譜ですが、歴史学、経済学、社会学に多大な影響を与えたことは、今やよく知られているでしょう。

こうして私の経済史研究は、今述べた「時間」の三層構造の上に立って、「長期持続」としての経済システム論を志向しました。しかも、システムの転換期における生成論（古代

から中世へ）を選好したのでした（『帝国と慈善ビザンツ』（創文社刊、二〇〇五年））。

経済社会分析の方法態度

「EUの歴史」を語る時、ヨーロッパの学者たちは、石炭鉄鋼共同体からではなく、キリスト教を紐帯として一体化してからの歴史、つまり一六〇〇年間の歴史を語ろうとします（exクシントフ・ポミアン『ヨーロッパとは何か』（平凡社刊、二〇〇二年））。

彼らは、①「歴史的現在」の組成を見抜くべきことを説きます。確かに、国民国家は歴史的産物であり、EUの国家原理は、「近代」を超えるものかもしれません。その論調は、②「国家」の多様性、歴史性を知る契機となるでしょう。難民受け入れの賛否を巡り、国民国家の限界が露呈する昨今、新しい価値の創造（カール・ポパー（一九〇二―九四）や山田雄三先生（一九〇二―九六）が説いた「社会的自由」が希求される^{ゆえん}所以です。

ブローデルやポミアンの提言は、③「地域」概念の射程を考察することの重要性を説いてもいます。確かに各地域は、「帝国」（神聖ローマ）、「国民国家」、「EU」等、国家形態の変遷を通じて存在しています。この点では、わが国の先達、本学の増田四郎先生（一九〇八―



一橋大学地中海研究会メンバーとは「旅」を重ねた。加藤博（アラブ近代史）、臼杵陽（中東現代史）、栗原尚子（スペイン地域研究）、三沢伸生（オスマン史）、堀井優（中東・ヨーロッパ関係史）、亀長洋子（イタリア中世史）、岩崎えり奈（北アフリカ地域研究）、澤井一彰（オスマン史）ほか国内外メンバーと（メテオラの修道院協にて、2016年3月）
[他の研究会メンバーに、齊藤寛海（イタリア中世史）、立石博高（スペイン近現代史）、長沢栄治（アラブ思想）の各氏らがいる]



チュニジア南部サハラ砂漠の縁で



友人ヴァイオス夫妻と娘マリアに連れられ、メテオラ大主教、カランバ市長（右）と一橋大学地中海研究会が交流した（2016年3月）



モスク（ジャミー）は、祈りと学びの場であり、附属施設として学校や病院を備えていた



先達との交流。辻佐保子先生（1930-2011）からはデカルト街に落ち着かれた頃の夫妻の写真が届いた（cf.「共鳴する魂」）



さまざまな出会いがあった。発掘現場（ゲミレル島第3聖堂）から出土した6世紀制作の「熊の敷石（モザイク）」（トルコ共和国ムーラ県）

ます。市場原理を核としながら、政府による再分配は不可欠です。しかし、等身大のわれわれの日々の営みは、互酬的でもあり続けるでしょう。

共存する空間 ヨーロッパ

多様な文化を共存させたヨーロッパ。

この文明世界は、キリスト教化されたローマ帝国で醸成され、その後の国家に受け継がれました。四世紀以来、帝都コンスタンティノブル（イスタンブル）に遠路到来した人びとは、そこで他所の文化に触れ、「世界」を知ったのです。

他者の文化（言語、価値観等）を知り、各々の存在を互いに承認する。異邦の人びと

を抱擁する街の作法は、小著の「旅」の出発地パリに今も息づいています。

こうして私の「旅」は、ヨーロッパから地中海を経巡る「探究の旅」となりました。各地で出会った歴史上のエピソー

ドは、ささやかな逸話にすぎません。が、いずれも「文明の作法」に触れる、歴史的含意に満ちた出来事だったかと思っています。

「旅」はなお続けます。幸いにして優秀な職員各位、学生たちと本学で過ごす時間は、かけがえのない旅の縁です。このキャンパスで、多くの優れた先達の息吹を感じながら、お互い研鑽に励もうではありませんか。まさに、場所に学ぶべし、でしょうか。

補足

拙著については、以下の書評があります。評言を寄せられた各位に感謝します。

- 一. 『読売新聞』二〇一六年二月一四日朝刊、納富信留氏（慶應義塾大学教授〈当時〉・古代ギリシャ哲学）
- 二. 『毎日新聞』二〇一六年五月八日朝刊、本村凌二氏（東京大学名誉教授・古代ローマ史）
- 三. 『如水会々報』二〇一六年八月・九月合併号、山内進氏（一橋大学前学長・西洋法制史）
- 四. 季刊『創文』二二二号（二〇一六年七月）、坂口ふみ氏（東北大学名誉教授・ヨーロッパ思想）
- 五. 『社会経済史学』近号、源河達史氏（東京大学教授・西洋法制史）

九七）が、「地域」に視座を置いて政治社会を見ることの重要性を、すでに提起していたことが思い出されます（『地域思想』筑摩書房刊、一九八〇年等）。スコットランドの今後の動きも、この視

座から理解できるでしょう。

彼らは、現象を、④「人間の経済」の原理（ボランニの言う「互酬」「交換」「再分配」とそのコンビネーションにおいて促えるべき、との認識で一致してい

「日本語の壁」を取り払い、 外国人留学生に学びやすい環境を提供

グローバル化推進の 原動力となるプログラム

“HGP”

一橋大学の交換留学生受け入れ数を再び増加させたのは、外国人留学生にとっての“壁”となっていた日本語能力の入学要件を見直し、国際教育の変革をもたらしたプログラムであった。本稿では、交換留学生の受け入れ数増加、日本人派遣留学生数の増加に寄与しつつ、学内全体のグローバル化推進にも大きな役割を果たしている“HGP”の取り組みについて紹介する。

現在、日本国内の各大学では、グローバル化に向けた取り組みが盛んに行われている。海外からの留学生受け入れ促進は、その取り組みの一つである。2008年に政府が発表した「2020年を目途に30万人の留学生受け入れを目指す」という「留学生30万人計画」の政策の一環として、各大学は国際的に魅力あるキャンパスづくりの努力を続けている。

より多くの外国人留学生を迎えるためには、単に受け入れの姿勢を示すだけではな

く、教育のインフラを充実させると同時に、教育の国際化を図ることが不可欠となる。一橋大学は独自の国際教育プログラムを創設し、留学生の受け入れ数を飛躍的に伸ばしてきた。そのプログラムが「Hitotsubashi University Global Education Program」(以下、HGP)である。

語学能力の入学要件を緩和し 交換留学制度を改善

留学生を受け入れる場合、日本の大学の課題となるのが、入学を希望する外国人の日本語能力要件である。かつて一橋大学でも交換留学生に対し、中級(日本語能力試験N2)以上の日本語能力を求めていた。つまり、一橋大学が協定校から受け入れる留学生は継続的に日本語を学んでいることが前提であり、日本語習得に対する一定の実績と高いモチベーションを持たない学生は、いかに学力的に優秀であっても受け入れの対象外となっていた。加えて、グローバル化による英語の国際共通語化や中国語台頭の影響を受けて、海外協定校で日本語教育の縮小が見られるようになると、交換留学生数は次第に減少していった。いくつかの協定校では、日本語学科や専攻が廃止となり、一橋大学との学生交流事業停止といった問題も起きていた。このような状況を改善するために2010年に発足したのがHGPである。

英語で学べる科目と初級日本語科目の充実をHGPの柱とし、協定校の学生は、日本語学習経験がなくとも、一定の英語力があれば入学可能と改め、学力の高い交換留学生の獲得と学生交流協定校の拡大を目指した。初年度となった2010年度の開講科目は58科目であったが、その後増加を続け、2016年度は全136科目(英語で学ぶ日本事情関係科目と社会科学分野の専門教育科目とを合わせて106科目、初級日本語科目が19科目、スタディスキル科目等が11科目)に達している。協定校からの交換留学生の数も2009年度の47人から、





2016年度は130人を超える規模にまで拡大している。元来、教育機関として高いレベルにある一橋大学は、意欲的な協定校の学生にとって魅力的な留学先であった。そこへ、障壁となっていた語学能力の入学要件を緩和（英語能力で代替可）し、英語による科目を充実させたことが功を奏し、優秀な交換留学生を受け入れる間口の拡大へとつながった。

HGP導入による 国際教育の充実が さまざまな副次的効果を 生み出す

英語による科目の増加と初級日本語科目の向上によって交換留学生の受け入れ数増加を目指したHGPは、過去6年間で目覚ましい成果を挙げただけでなく、さまざまな副次的効果も生み出すこととなった。

一つ目の効果は、学生の多様性が拡大したことだ。入学の語学要件を緩和した結果、海外協定校から一橋大学へ交換留学を希望する学生たちの志向の多様化が進んだ。中・上級レベルの日本語能力習得を目指す日本語専攻の学生、日本の文化や社会に対する興味、関心をベースとした日本学やアジア学専攻の学生、経済学、経営学など社会科学を専攻しながら日本を研究対象とする学生など、動機や背景はさまざまだが、いわゆる「日本を学ぶ（日本について専門的に学ぶ）」留学生だけでなく、「日本で学ぶ（社会科学を専攻し、日本を対象領域として学

ぶ）」留学生が、一橋大学に世界各国から集まるようになったのである。また、HGPは全学生を対象としていることから、日本人学生・学位取得留学生、学部生・大学院生、所属学部・研究科といった区分を超えて、共に学び合い、教え合い、交流を深めることができるようになった。つまり、HGPの英語による科目の受講を通して、多様な学生たちが一橋大学の中で出会い、グローバルな環境を体験できるようになった。

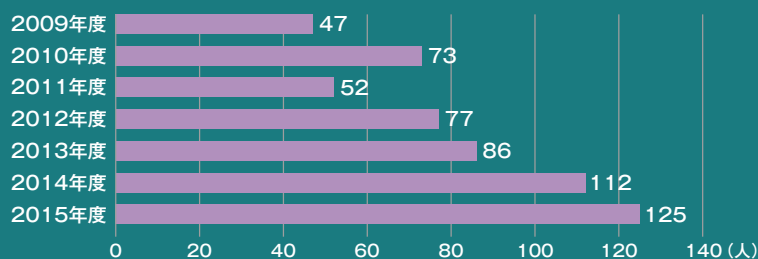
二つ目の効果は、多様化する日本語学習ニーズへの対応力が強化されたことだ。HGP発足以来、日常生活で困らない程度の日本語能力を身につけたい、短期間で徹底して日本語を学びたい、来日までの学習で中級程度には達しているの上級を目指して学びたいなど、交換留学生の日本語学習に対するニーズが多様化している。そうした幅広いニーズに応えるべく、目的別、技能別、レベル別に日本語教育科目を提供できるのが国際教育センターの強みである。

HGPで英語による科目が増強されたこ

とにより、初級日本語教育の需要が高まり、そのことが国際教育センターの日本語教育力をいっそう高めることになった。

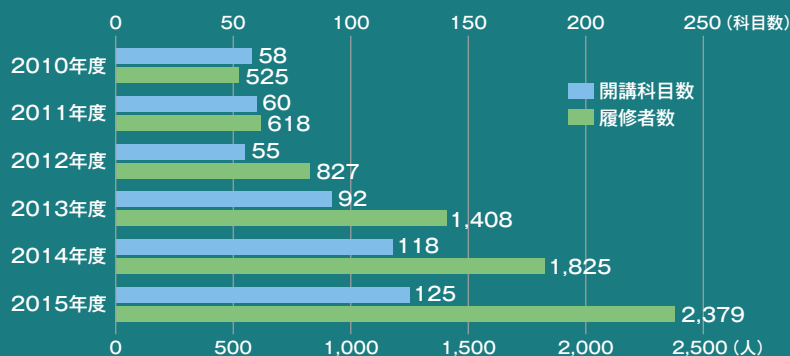
三つ目の効果が、学生交流協定校の増加（2009年は大学間協定の20校のみだったものが、2016年には大学間協定が66校、学部間協定が10校に増加）と一橋大学から協定校への派遣学生数の増加だ。大学間で学生交流協定を締結すると、毎年度、同数の学生を交換（派遣・受け入れ）することになり、学生は本来の所属大学に学費を納めることで、協定校でも学ぶことができる（授業料相互不徴収）ようになる。言いかえる

交換留学生等年度別受け入れ数



*2011年度は、東日本大震災のため一時的に減少

HGP開講科目数と履修者数（延べ人数）の推移

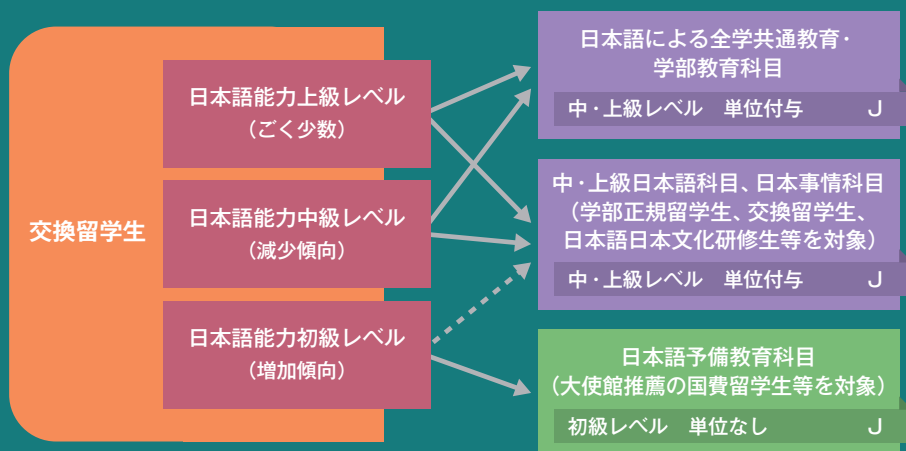


と、一橋大学から協定校に一定数の学生を派遣するためには、その協定校から一橋大学へ留学する同数の学生が必要なのである。HGPを通して英語による科目と初級日本語科目の充実を図ったことが、海外の著名大学のニーズに応えるものとなり、協定校の増加へとつながり、増加した協定校から交換留学生が一橋大学へ継続的に派遣されるようになった結果として、一橋大学が協定校へ派遣する学生数も増加してきたのである（国際学生交流拡大の連鎖）。

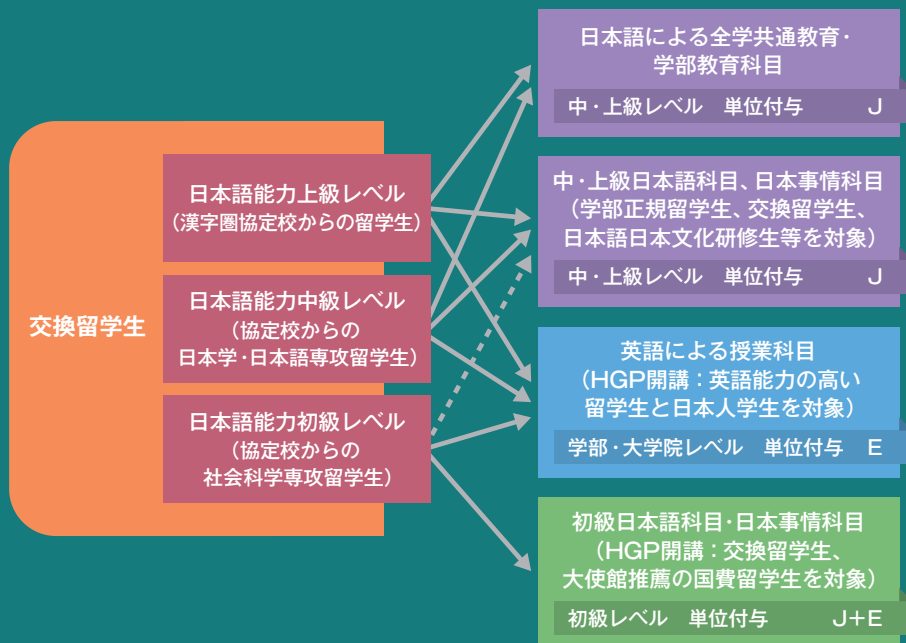
四つ目の効果として挙げられるのが、より勤勉で優秀な交換留学生を協定校から獲得できるようになったことである。前述の通り、以前は、中級程度の日本語能力のみが受け入れの要件として課せられていたが、HGP開設後は英語か日本語どちらかの語学力が一定レベルであれば良いと緩和した一方で、4・0スケールのGPA（Grade Point Average）に累積2・7以上という学業成績基準、指導教員による推薦状の提出など、新たな出願要件を課した。この改定により、学力の高さと勤勉性を重視して、質の高い交換留学生を受け入れられるようになったのだ。実際、いくつもの海外協定校から、一橋大学は日本の交換留学先で最も人気が高く、最も競争率が高いと言われている。

HGPの創設と発展は、このようなさまざまな効果とインパクトを生み出しながら、

HGP設置前：交換留学生（受け入れ）の日本語レベルと履修形態



HGP設置後：交換留学生（受け入れ）の日本語レベルと履修形態



※実線は主な履修形態、点線は履修の可能性を示す。
※Jは教授言語が日本語、Eは教授言語が英語を示す。

グローバル化に対応した国際教育を目指すマインドの変化

一橋大学全体のグローバル化を推し進めるキファクターとなっている。

一橋大学は、高い日本語能力を備えた外国人を学位取得留学生として迎え、日本語による教育を通して世界に貢献できる人材

を養成するという従来の方法は堅持しつつ、

HGPの創設によって幅広い交換留学生の獲得、そしてグローバル化への取り組みを進めてきた。その際に重要なポイントとなったのは、教育システムの量的整備と質的充実に加え、大学としてのマインドを変化させることだった。その一例として挙げられるのが、初級日本語科目の正規授業化（単位化）である。



グローバル化推進の原動力となるプログラム“HGP”



HGP創設以前、上級の日本語能力は一橋大学で学位取得を目指す留学生が最低限習得していなければならないものと捉えられていた。そのため初級日本語教育は、研究生を対象とした準備教育プログラムとして位置づけられ、正規科目ではないために単位化されていなかった。よって、交換留学生が履修した場合、単位が取得できず、帰国後、所属大学で単位編入の対象外とされていた。一方、英語以外の初修外国語（第二外国語）科目は、当初から単位化されていた。外国語としての日本語と捉えた場合、留学生が初級日本語科目の授業で単位を取得できなかったことは、実質的に不公平な状態にあったと言えるだろう。初級日本語科目を正規科目として位置づけ、単位化したことが、多くの交換留学生にとって一橋大学を選ぶ理由の一つになっているようだ。また、大学は自国民のためだけでなく、グ

ローバルな観点から世界の多様な人々に対しても教育を行う機関であるという、マインドの変化も必要である。従来の日本的な「型」に捉われることなく、多様な留学生の目線から教育の質的向上を図る意識が求められるということだ。「グローバル化した世界に対応する国際教育を推進するためには、まず大学の『開放性』を高め、多様な学生を受け入れるべく『融通性』を高める。そして、教育の国際的な『通用性』を高めることで、世界の大学とつながる『接続性』が高まり、世界の多様な大学とのネットワークの下、学生や教職員の『流動性』を高める。その結果、大学の『多様性』が高まる。この連鎖を起こすことで、本質的な大学の国際化が実現できる」と太田浩国際教育センター教授（HGPディレクター）は語る。

英語による科目の増加と学内全体のグローバル化

2010年の開設から7年目になるHGP。その間、英語で行われる科目の数は増加を続けてきたが、背景には2012年に文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」に採択された商学部「渋沢スカラープログラム」と経済学部の「グローバル・リーダーズ・プログラム」の存在がある。事業採択を機に、商学部、経済学部の英語による科目が増え、HGP全体として多くの専門教育科目を英語で学ぶ環境を整備する方向性に拍車がかかったのである。また法学部は、政治学や国際関係論を中心に英語に

よる科目数を増やしており、社会学部も2015年から英語による科目が増加するなど、各学部が英語による専門科目を増やす動きを見せている。

HGPが今後目指すべきこととして挙げているのが、日本人学生の履修者数増加である。HGPの開講科目は、一橋大学で学ぶすべての学生を対象としており、留学生と日本人学生、学部生と大学院生の間に垣根がないという特徴がある。日本人学生は、英語力に不安があると、GPAが下がることを懸念してHGP科目の履修をためらう傾向があるという。しかし、HGPは、英語による授業を受けるために必要な英語力とスキルを身につけられる科目「Academic Skills Program」も提供している。また、外部講師を招聘して開催する「HGPセミナー」は、誰もが参加でき、英語による授業を体験できる機会として提供されている。英語による科目の充実に加え、留学生に対してはニーズに合わせた日本語教育科目を提供し、日本人学生に対しては英語による授業への不安を払拭するための科目群を用意する。そうした幅広い取り組みによって、学内全体のグローバル化をけん引しているのがHGPなのである。

グローバル化の進展に伴い、大学にも国際的な視点による変革が求められている。HGPは、一橋大学の国際教育における中核として、更なる変革を推進するうえで重要な役割を今後も果たしていくことになるだろう。



グローバルな視点で ローカルの観光戦略を変える

渋沢スカラープログラム (SSP) 受講生が 鳥取県米子市に持続的発展プランを提言

「グローバル」とは何か。それは、単に英語でのコミュニケーションや
海外で活躍することだけを意味するわけではない。

商学部「渋沢スカラープログラム」(Shibusawa Scholar Program: 以下SSP) のディレクターを務める
クリスティーナ・アメー جان教授の言葉を借りれば、今日の世界はより密に相互依存している。

ローカルな事象から、多様なアイデアやビジョンに気づくこともできるのだ。

今回レポートする「米子プロジェクト」は、まさにそれをSSP受講生が実体験し、
グローバル・リーダーに求められる資質を養う貴重な機会になった。

今日の世界を、
「国内の地域」で
体験的に学ぶ

「米子プロジェクト」とは、鳥取県米子市の観光戦略をテーマに掲げた提言プロジェクトであり、観光客の誘致を目的に、米子市の関係者と商学部のSSP第2期生7人が協働で行っている。

ちなみにSSPは、一橋大学の「グローバル・リーダーズ・プログラム」の一環として行われている商学部の選抜教育プログラムで、「英語で専門科目を学ぶ」「1年間の留学が必須」といった特徴を持つ。そう聞くと、なぜ受講生が日本国内の地域の課題解決に取り組むのか、首をかしげる向きも多いだろう。しかし、養われる底力という観点で見るとSSPと「米子プロジェクト」の狙いは合致する。SSPの教育コンセプトは「Out of Comfort Zone」。つまり、「慣れない環境にも飛び込んでいける力」が、グローバルな環境でリーダーシップを発揮するには欠かせないと考えられている。普段は都会の住み慣れた環境で学業に勤しむ学生にとってはおさらだ。「米子プロジェクト」は、今日の世界を体験的に学べる「国内留学」ともいえる。



美しい自然や美味しい海産物など、観光資源が豊富な米子市

米子市とSSPの
タイアップが、
「二橋大学の縁」で
瞬く間に実現

「米子プロジェクト」は、SSPに組み込まれたプログラムの一つではなく、偶然が重なって生まれたというから興味深い。きっかけとなったのは、SSPディレクターを務めるアメー جان教授への「ある依頼」だったという。

依頼主は、一橋大学の卒業生で鳥取県出身の吹野博志氏(1965年経済学部卒業)。依頼の内容は、母校である米子東高等学校で一橋大学の魅力を紹介する出張授業をして欲しいというものだった。以前から吹野氏と親交があったアメー جان教授は快諾し、同校を訪問。そして、帰りにアメー جان教授が吹野氏に打診したのが、米子市とのタイアップによるSSPの特別プログラム実施だった。受

講生が観光ツーリズムの研究プロジェクトを進行中で、海外留学も控えていたことから、日本の伝統や文化に触れる機会をつくりたいという思いによる発案だった。

打診を受けた吹野氏は、同郷の一橋大学卒業生で親交のあった永瀬正治氏(1958年商学部卒業)に相

談。永瀬氏は米子市で石油会社を経営し米子商工会議所の会頭も務めた人物だけに、地元経済界が全面的にバックアップする受け入れ体制が瞬く間に整う。全国津々浦々に広がる一橋大学のネットワークの強さを物語るエピソードといえるだろう。こうして「米子プロジェクト」は実現する運びとなった。

地元の経済界も期待した、SSP受講生の問題解決策

SSP受講生は観光戦略を提言するにあたって、現状と課題を把握するために



一橋大学OBで米子市の名士である、永瀬正治氏（右端）とともに。永瀬氏の多大な協力があって、米子市とのタイアップが実現

力ではなく、地域を再生する提言そのものへの切なる期待だったことがうかがえる。対して、SSP受講生がまとめた観光戦略はどのようなものだったのか。日本国内における観光客誘致と、外国人旅行者を誘致するインバウンド効果を狙うという、二つの方向から具体策が練られた。SSPというグローバルを学ぶ環境に身を置くからこそ提案できる、広角的な視点での解決策であったこと、チラシの配布や渉外活動といった過去の周知PR手法を前提としない、効率的かつ効果的に魅力を拡散させる現代的なプロモーション手法が盛り込まれ

鳥取県西部を視察（2016年3月27、29日）。米子市では鳥取砂丘に並ぶ県の自然遺産である大山の魅力について説明を受け、境港市では市観光協会から「妖怪」を活かしたまちづくり施策について話を聞くなど、さまざまな情報収集に奔走した。そして約2か月後、アメージョー教授同行で再び米子市を訪問。分析や検討を経てまとめた観光戦略の発表を市内のホテルで行った（2016年5月14、15日）。この発表会には、米子市・境港市の経済人など50人が出席したという。「米子プロジェクト」が地元にとって、大学が実施する教育プログラムへの単なる協

力ではなく、地域を再生する提言そのものへの切なる期待だったことがうかがえる。対して、SSP受講生がまとめた観光戦略はどのようなものだったのか。日本国内における観光客誘致と、外国人旅行者を誘致するインバウンド効果を狙うという、二つの方向から具体策が練られた。SSPというグローバルを学ぶ環境に身を置くからこそ提案できる、広角的な視点での解決策であったこと、チラシの配布や渉外活動といった過去の周知PR手法を前提としない、効率的かつ効果的に魅力を拡散させる現代的なプロモーション手法が盛り込まれ

ていたことも、特徴といえるだろう。SSP受講生が行った発表内容のポイントをも、もう少し具体的にご紹介しよう。

観光戦略の鍵は、「長期的な誘致」と「ターゲット設定」

一つ目のポイントは、「観光」というもののとらえ方にある。訪れた人に現地でお金を落とすしてもらっただけでは、短期的にしか観光客を獲得できない。そう考えたSSP受講生たちは、持続的な獲得策であることを重視し、「米子のファンをつくる」を観光戦略の目的とした。観光客のファン化は長期滞在や再訪問を促し、最終的には移住者となって地域の活性化を導ける。



フィールドワークの様子。米子城址にて



そして二つ目のポイントは、「ターゲット」を誰に設定するかだ。ファンづくりを推進するにあたって、SSP受講生たちは想定する観光客を「欧米系」「中国人」「日本人」という三つのカテゴリーに分類した。まず「欧米系」に対しては、定番の観光地やツアーを好まず、自由な旅行スタイルを好むという特性に注目。それに合わせた観光サービスを提供するため、米子市街地の空き家をリノベーションし、Airbnb（エアビーアンドビー）宿泊施設・民宿を貸し出す人向けのウェBSITE（ウェブサイト）を利用して貸し出すことをプランに盛り込んだ。次に「中国人」に対しては、爆買いから日本の文化・自然への興味をシフトしているという傾向に着目。米子市の文化・自然を堪能できる「爆体験ツアー」を考案し、Weibo（ウェイボ）・中国最大のSNS）とWeChat（ウェイシン）中国大手IT企業が提供する無料通話・チャットのコミュニケーション



境港市では、「妖怪」を活かしたまちづくりについて情報収集を行った

アプリ」での周知PR活動を提案した。最後に「日本人」に対しては、人通りが少なく活気のない市街地に注目。懐かしい下町の景色を楽しめる加茂川周辺エリアの空き家を無料で貸し出すプランを提示し、レストランやカフェなどを起業するための資金援助の必要性にも触れた。目標は、歴史的な街並や自然と人々の生活が融合するバリののようなムードを生み出し、ファンづくりにつなげることだ。

このエリアが憩いの場になれば、地元住民も自分の街のファンになる。このことは、街全体のムードを盛り上げ、観光客を呼ぶうえでも重要と、SSP受講生は訴えかけた。



新鮮な牡蠣、大山鶏などを実際に食べて、地元の観光資源を研究

「地域再生」は、課題解決力を磨く格好の素材

発表会では、米子市全体のプロモーション手法も提案された。これは、オーストラリア政府の観光局が実施したキャンペーン「Best Jobs in the World」に倣ったもので、米子市で「日本最高の仕事」を手掛ける人物をクローズアップすることで、全国はもちろん世界からも注目を集めるというプランだったことを付け加

Key Person's Voice

地域が持続的に発展できる観光戦略であることが重要です



株式会社吹野コンサルティング
代表取締役社長
株式会社NGR取締役副会長
株式会社オレガ取締役会長

吹野博志氏

初

めに私の母校での出張授業を依頼した背景からお話しすると、グローバルとは何かを高校生に頭で理解させようとしても無理があります。アメーじゃん教授にお願いしたのは、存在そのものがグローバルな方に人生そのものを語っていただくほうが、生徒にとって大きな刺激になると考えたからです。体育館に集まった全校生徒の前に、英語を交えて体験談などを話していただきましたが、終了後には留学したいと教員に申し出る生徒が早々に現れるほど、相当なインパクトがありました。

一方で、アメーじゃん教授も米子市という地域の魅力に触れて感動してくださいました。ぜひSSPの特別プロジェクトを行いたいと申し出があったわけですが、その時頭に浮かんだのが一橋大学の先輩であり、地元経済界に太いネットワークを持つ永瀬さんでした。今回のプロジェクトを早期実現に導いた最大の功労者で、私は橋渡し役に過ぎません。趣旨を説明したところ快諾され、そこからはほとんど拍子に話が進みました。SSP受講生の旅費や宿泊費を地元で負担し、発表会を行うなら地元経済界に向けてやらない手はないということで、市長をはじめ商工会議所の会頭、地元の経済同友会代表幹事など、総勢50人のVIPにお集まりいただいたことに驚きました。

米子市という地方都市を、どうすれば活性化できるか。

現

在、日本の大学生の多くが関東圏の大学に集中していると感じます。グローバルと盛んに叫ばれていますが、周りの大人も含めて東京しか知らないようでは、多様性を受け入れることも難しいでしょうし、世界に出て行った時に日本のことを尋ねられても語れません。そういう意味でも「米子プロジェクト」はSSP受講生にとって、地方の魅力と課題を知る貴重な機会になったはずです。また、永瀬さん、アメーじゃん教授、私、地元経済界の方々といったネットワークの広がりに触れ、人脈がいかに大切で、それは長きにわたる信頼関係から築かれることを知る機会にもなったと思います。

SSP受講生、ひいては一橋大生には、今回のようなプロジェクトをぜひ自ら立ち上げ、成果をどんどん発信してもらいたいですね。そして実現するためにも、一橋大学のネットワークを利用できるだけ利用して欲しいと思います。(談)

Profile

1966年、一橋大学経済学部卒業。1985年、ハーバード大学ハーバード・ビジネス・スクール(経営大学院 上級経営学コース (AMPE) 修了。デルコンピュータ株式会社代表取締役会長など数々のグローバル企業で経営トップを歴任し、現在に至る。この間、一橋大学非常勤講師、社団法人如水会常務理事等も兼務。



えておく。

総じて、グローバルな視点を注入した目新しい観光戦略は、会場に集まった出席者に地元が発展する可能性が少なからず残されていることを提示した。一方で、SSP受講生にとっては戦略の立案が「Out of Comfort Zone」を実践する貴重な機会になった。住民が感じる地元の魅力と海外から見た魅力とのズレ。高齢者世代である関係者と、若者世代とのコミュニケーションギャップ。あらゆる違いを肌で感じるものが、グローバルに闘う際の糧になることを「米子プロジェクト」から感じたに違いない。

地域の再生は、米子市に限らず日本が抱える大きな課題だが、次世代を担う若者にとって、実践的に課題解決力を磨くことのできるテーマであるともいえるだろう。今後の「橋」で「米子プロジェクト」のような試みが、日本中の地域において展開されていくことが期待される。日本の明るい未来をも育む、グローバルリーダーを育成するプログラムとして。

Kaito Ozawa

Student's Voice

米子で学んだことは、
とてもグローバルでした



商学部3年
(SSP第2期受講生)

小澤海人さん

「米

子プロジェクト」で一番印象に残っているのは、価値観の異なる相手に伝えたいことを伝える難しさです。観光戦略の発表会では、地元経済界で活躍されてきた方々にプレゼンテーションしましたが、ほとんどが私たちとは世代が異なる60歳以上の方でした。たとえばプロモーション手法は、海外で話題のキャンペーン手法を持ち込むだけでも米子市を差別化する魅力になると考えて提案しましたが、SNSというワードが出ればその説明から始めなければ理解していただけません。普段は同じ価値観を持つ同世代とのコミュニケーションに慣れているだけに、そのギャップやジレンマは大きなものでした。しかし、それを実感できたことに価値があり、多様な相手と交渉できるよう自分を鍛える貴重な機会になったと思います。

発

表を終えて、地元の方々からは新しい視点を提供するという点で高く評価していただきました。一方で、たとえば米子市と結びつきが強い大山エリアの魅力をアピールする案も含めて欲しかったという声も多く聞かれました。これは視察の時点からの要望でしたが、観光客に魅力の理解を求める前に、観光客から求められて

「米

子プロジェクト」に参加して良かったと思うのは、地方の魅力や課題を知ることができたことです。暮らしている人々も、都市のお年寄りや地方のお年寄りでは全く違います。考えてみれば当たり前のことですが、今まで実感できる環境がなかったわけです。グローバルとは、いろいろな価値観を持つことだと思います。その意味でも、米子市で学んだことはとてもグローバルでした。2016年9月から交換留学生としてベルギーの大学で学ぶ予定ですが、現地にいる前の有意義なトレーニングにもなりました。「グローバルを知るなら、日本の伝統や文化を知らないダメです」。これはSSPが始まる際に聞いたアメリカン先生の言葉ですが、その意味が「米子プロジェクト」に参加してよく分かりました。(談)



People

一橋大学端艇部出身者2人目の、
オリンピック出場。

その歴史と伝統に、
輝かしい1ページを飾る

第13回

リオデジャネイロオリンピック
ダブルスカル男子軽量級
日本代表選手

中野 紘志 氏



橋人皆漕——。「一橋大学の学生は皆、ボートを嗜む」。

この言葉に象徴されるとおり、一橋大学のシンボルの一つとしての歴史と伝統を誇る、端艇部。その卒業生が、日本代表選手としてオリンピックに出場することになった。

快挙を成し遂げた中野紘志は、高校3年生の時、

オープンキャンパスでこの『H.Q.』を見て端艇部の存在を知る。

そして、4年間の苦しい練習生活に耐え、社会人選手から腹をくくってプロの世界に飛び込み、日本初の『プロボート選手』となって栄光をつかんだ。その稀有なる軌跡を追う。(文中敬称略)

10歳の頃、長野五輪を見て描いた夢を28歳で実現

2016年開催の第31回オリンピック競技大会(2016/リオデジャネイロ(以下、リオ五輪))。そのボート競技のうち、日本からは男女それぞれ2人ずつ、計4人の選手が出場する。種目は、「ダブルスカル」男子軽量級と女子軽量級。そのうちの1人が、中野紘志(28歳)だ。2011年に商学部と端艇部を卒業した、一橋大学の卒業生である。

ここでまず、ボート競技の説明をしておく。ボート競技の種目は、1人のクルー(選手)が2本のオールを両手に1本ずつ持つて漕ぐ「スカル」種目と、1本の大きなオールを両手で漕ぐ「スウィープ」種目に大別される。そして、クルーの人数により、スカルの場合は「シングルスカル」「ダブルスカル」「クオドルブル(4人乗り)」、スウィープの場合は「ペア」「フォア」「エイト」に分かれる。クオドルブル、ペア、フォア、エイトにはさらに舵手付き、舵手なしがある。男女に分かれ、また体重によって軽量級とオープン種目に分かれ、チームが組まれる。オリンピックなど国際大会では、



天然の河川湖で直線距離2000mを競うことになる。

世界の強豪は、オリンピックのメダルの数ではドイツ(東ドイツ、西ドイツ、東西統一ドイツを含む)の116個(うち金メダル60個)、アメリカ合衆国が84個(同31個)、イギリスの54個(同24個)が上位を占め、ヨーロッパ各国やオーストラリアが続く。日本は、1928年の第9回アムステルダム五輪に初出場して以来、第二次世界大戦の影響を受けた第12、14回以外のすべてのオリンピックに出場している。最高成績は、2000年のシドニー五輪と2004年アテネ五輪の、いずれもダブルスカル男子軽量級6位。メダルの獲得は悲願ではあるが、現状では出場枠の多い「ダブルスカル」男女軽量級以外、地域予選の段階で本大会への出場を断たれるというレベルにとどまっている。現在の最強国であるフランスとは、2000mのレースで20秒、距離にして100mという大差がついているという。

という。

リオ五輪に出場する日本代表選手の選考は、2015年10月に始まった。まず個人として一定の距離を一定の時間で漕げるという条件が付されるため、この段階で候補者は10程度に限られる。その後、12月まで数回の選考レースが行われ、徐々に絞り込まれていく。

「この間ずっと1〜4位を維持していたので、

最終選考に残る自信はありました」と中野は述懐する。2015年度の日本代表に選ばれていたことも、中野の自信の裏付けとなっていた。しかし、不安も大きかった。「選考レースの前にインフルエンザなどに罹ってしまったら一発でアウトです。不測の事態だけは怖かった」と吐露する。

そして2016年3月、中野は大元英照選手(アイリスオーヤマ)とともに最終選考を勝ち抜いた。4月25日、韓国で行われたリオ五輪のアジア・オセアニア予選決勝に出場した中野・大元チームは2位でゴール(予選は1位通過)。見事1位となった女子の富田千愛選手(明治大学大学院)・大石綾美選手(中部電力)のチームとともに、3位以内というオリンピック出場条件をクリア、リオ五輪への出場を勝ち取った。5月18日、その4人がリオ五輪に出場する日本代表選手として正式に内定する。

「10歳の頃、長野五輪でスピードスケートの清水宏保選手が金メダルを獲得したのをテレビで見た時、自分もオリンピックに出たいと憧れました。それからそのことは頭の片隅に追いやられていましたので、まさか19歳の時に合ったボートでオリンピックに出られるとは、と信じられないような気持ちでした。出場が決まった時点で、10歳の頃からの夢が実現した、という感じがですね。もちろん、オリンピックへは万全の準備をして臨み、メダルを目指して全力で頑張ります」と中野は意気込む。

兄の死に「この世に生きた証を残したい」と求め続けた自信

石川県金沢市に生まれた中野は、小学校時代は水泳、中学校ではサッカー、高校1・2年の頃はテニス、そして高校3年の時は陸上と、いろいろなスポーツに取り組んだ。

「ずっと自信がなかったのです。だから、努力は報われる」という言葉を信じ、自信をつけるために努力したつもりでしたが、どの競技もある程度のレベルにはいけてもそ



こちら上にはいけませんでした。それでいろいろな競技に手を出したという感じでしたね」

「自信がほしい」との思いの背景には、3歳上の兄を亡くしてしまふという不幸があった。

「入ってすぐに死んでしまふものなんだな、と。ならば自分はこの世に生きた証を残したい、と思うようになったのです」

そんな思いが、中野をオリンピック選手にまで導いたのかもしれない。

中野が進学した県立金沢二水高校では、「一橋大学に入学するのは、4年間で1人ぐらいでした」という。スポーツで結果が出せないなら、大学進学に当たっては学力的にハイレベルのところに入り、自信をつけたいという思いが強かった。そして、大学選びで中野は偏差値表を一番上から見ていき、「一橋」という文字に惹かれる。

「東京や京都という地名ではなくて、単純にカッコ良いと(笑)。自分の高校からは減多に合格者が出ないレベルの高

さでしたし、経営学や商学に興味もありましたので、目標としてちょうどいいと思ったのです」

高校3年の夏、一橋大学のオープンキャンパスに参加した中野は、資料として『H.Q.』を受け取る。その号では、端艇部を紹介する記事が掲載されていた。中野は、その記事の写真に引き込まれる。

「その時初めてボート競技というものに興味を持ったのです。写真ではありましたが、水の上を颯爽と滑る様が非常にカッコ良くてきれいだと思いました」

現役での受験は不合格であったものの、一浪で臨んだ商学部の後期試験に合格する。「競争率が非常に高く諦めモードではあったが、合格できて良かった」と中野は振り返る。入学すると、アメリカンフットボール部やクロクロス部など、さまざまな部活や同好会から入部の誘いを受けた。一瞬惹かれはしたものの、「自分はスピードより体力派を自認しているので、瞬発力が求められるアメフトは難しい。クロクロスも、ボールのスピードについていけないから無理だ」

と思いとどまり、もともと惹かれていた端艇部の門を叩く。中野はほかの部員同様、端艇部の艇庫や部室、練習場のある戸田漕艇場の近くに住み、国立との間を往復する生活が始まった。

「特に1年生は1時限目を履修する学生が多いので、早い時は3時半に起床でした。夜明け前の暗い中ボートを漕ぎ、朝ごはんを食べて国立に行き、戸田に帰ってきて再びトレーニング、という毎日でした。商学部は授業の出席もレポート提出も厳しかったですし、部活を休むことも考えられなかった。とにかくキツかったという印象しか残っていません」と中野は打ち明ける。

端艇部伝統の「商東戦」とインカレ勝利に向けて猛練習

一橋大学のボートの歴史は、「開成学校」に遡る。1885(明治18)年に東京商業学校(現・一橋大学)と合併する東京外国語学校の前身だ。イギリス出身の英語教師であったストレンジが学生に熱心にボートを教えたとされる。ストレンジはスポーツマンシップやジェントルマンシップを強調して指導したが、それが当時の学生の武士道や士魂商才の精神とマッチし、学生生活に浸透していった。1887(明治20)年、東京帝国大学の向島艇庫の完成を機に競漕大会が開催され、第一高等中学校、高等師範学校、そして東京商業学校が招かれての文部省直轄校レースが行われた。このわが国初の正式な対校レースが、後に「商東戦」(一橋大学・東京大学対校競漕大会)に発展し、今日に至る歴史と伝統を重ねていくことになったのである。ちなみに一橋大学は、2016年5月の第68回商東戦において優勝し、8連覇を達成している。

「商東戦も重要ではありますが、両大学のボート部においては、今ではインカレ(大学間の対抗競技)が最も重視されていますね」と中野。両大学にとって「インカレの前に商東戦で負けていてはどうしようもない」という位置づけ

になっているという。そのインカレにおいて、中野の1・2年次、一橋大学は予選敗退という不甲斐ない成績であった。「ヘッドコーチが『ただ漕いでいるだけで、勝たなければ意味ないだろう』と。選手たちもこんな悔しい思いはいやだと発奮しました。そして、練習量が倍増されたのです」

練習は週7日、11回。うちウエイトトレーニングが3回、陸上練習が1回、乗艇練習が7回である。それまでは1日あたり12〜15kmを漕いでいたが、20〜24kmに増えた。たっぷり2時間は漕ぎ続けるというハードさだ。準備や片付けを入れて2時間半、集中して取り組む。そんな厳しい練習の日々、やめようとは思わなかったのだろうか。

「何度もしましたよ。けれども、これまでいろいろなスポーツをやってきました。ここでボートを諦めたら、もう次はない。そんな状態で卒業するのはいやでした。だから、卒業までは続けようという意志は固めていましたね」

やる気がなくなりそうな時は「そういう状態を楽しめばいい」と開き直れたことが良かったという。やめていく人は、「頑張らなければいけないのに、なぜ自分は頑張れないのか?」と自らを責めるタイプが多かったからだ。

「そんな時は、いい意味で適当に流す。そんな時間にも時には必要ということだと思っています」

また、戸田から行く一橋大学のキャンパスも、疲れた中野を癒やしたようだ。

「兼松講堂など、国立キャンパスの建物や自然がきれいで、気分転換できましたね。自分のような地方出身者には、都心ではない国立というロケーションも良かったと思います。キャンパス全体に優しさ

と温もりがあるように思えて、ホッとできましたから(笑)」3年次からの猛練習は、その年のインカレで4位入賞という成果を一気にもたらした。翌4年次も4位であった。

「勉強でも集中して『ガリ勉』をすれば、ある程度の成績は取れるようになりますよね。ボートもそんな感じですが、そこから上にはなかなか上がれませんでした」

一橋大学の端艇部は、伝統的に「体力勝負」の傾向があ

る。しかし、ボート競技は体力だけでは勝つことができない奥深さもあるのだ。一度もインカレを制することができていないのは、「『うまく漕ぐ』技術の不足と、8人のクルーの息の合わせ方が不足していたから」というのが中野の見立てである。

「漕ぐ力と、うまく漕ぐ技術のバランスが高次元で取れることで、初めて優勝できるスピードが得られるのだと思います。それと、8人の息をピタリと合わせなければなりません。1人でもずれると、何人分ものマイナスになってしまいます。まさにチーム競技の最たるものだと思います」

「世界U23ボート選手権」で日本選手として初のメダル獲得



一方で、猛練習により中野の能力はグングン伸び、3年次に「U23」(23歳以下)の日本代表に選出される。「シנגルスカル」によるタイムが選出基準をクリアしたのだ。そして、2009年にチェコで開催された「世界U23ボート選手権」の男子軽量級舵手なしフォアに出場し、なんと銀メダルを獲得。同選手権で日本選手として初のメダル獲得という快挙である。ボートを始めてまだ丸2年

のこと。さぞ自信になったに違いないと思われるが、中野はブログで次のように当時を振り返っている。

「日本人初で、凄いいことのはずだが、

その結果で自分に自信がつくことは全くなかった。今まで何年も何年も追いかけてきた『自信』、それを手に入れるために追い求めた『結果』、それがやっと手に入った。だが、つかなかった。自信はつかなかった。運だと思った。凄い人は日本にも世界にもほかにたくさんいると思った。上には上がいる世界がさらに広がるだけだった」

中野は「世界」を知り、彼(ひが)の差を実感する。そして、さらに「自信」を求めてボートに打ち込み続けた。

そんな苦しい練習を重ねた中野の4年間は、充実していた。次のように振り返る。

「よく4年間も、こんな一見非生産的なことを皆で頑張ったり、資格を取得したりという、目に見える『果実』が得られるわけでもないのに、勝ち抜くために全力を注ぐという価値観を仲間と共有し、同じ時間を分かち合えたわけです。これは、自分にとってはかけがえのない時間となりましたね」

中野は「非生産的」と表現するが、「『負けじ魂』を養う」「目標に向かって一致団結し苦難を乗り越える」「チームワークを尊重する」などといった、目には見えない力が大いに鍛えられたに違いない。そして、そういった素養こそ、企業が採用する人材に求めているものである。

「端艇部の出身者は、皆さんいい企業に就職しています。端艇部での活動も評価されたということでしょうね」

そう言う中野も、卒業後はNIT東日本に入社した。決め手は、全日本優勝を目指していたボート部の存在であった。同社のボート部は、それまで全日本選手権大会で7度の優勝を果たしている強豪である。せっかくなら、上を目指して活動しているチームに入ろうと、同社を志望したのだ。

あくまでも、ボートが中心にあった中野は、「仕事は、やらせてもらえるものなら何でもい」と思っていた」と明かす。就職活動の際に、一つの決心をしていたからだ。

「当初は、なんとなくボートは大学の4年間で終わり、と考えていました。しかし、U23で世界第2位という成績を取ったことで変わったのです。ボートが、自分の人生で初めて手にした取り柄らしい取り柄となったからです。よう





よく見つけたこの取り柄を自分から捨ててしまうほど、ほかにやりたいことは見当たりませんでした。ですから、大学を出ても続けられるだけ続けよう、と」

NTT東日本では、まずコールセンターに配属された。法人向けの電話窓口で、電話回線の申し込みや移転などの手続きを受け付けるオペレーター業務である。顧客対応の手前、休日出勤や残業もあり、決して楽な仕事ではなかった。

ボートの練習時間に支障を来さずとも、肉体的・精神的に影響を及ぼした。つまり、仕事とボート部の両立に悩み始めたということだ。そこで中野は、会社にも異動を願ひ出る。

「事情を話し、出世などはもう度外視してかまわないので、時間的にも肉体的にも負担の少ない部署に異動できないかと相談したのです。そうしたら、蛍光灯の交換などをする庶務的な部署に移してもらえました。蛍光灯にもいろいろな種類があることを初めて知りましたね(笑)」

社会人選手としてのジレンマに陥り日本人初のプロの道へ

2012年。社会人2年目、24歳になった中野は、U23に引き続き、シニアの日本代表に選出された。そして出場した世界大会で、U23の時に勝った相手に大差で負けてしまったのである。翌2013年、2014年と立て続けに負けた。社会人選手としての3年半、何一つ成果を挙げられないことに、中野はショックを受ける。

「部署を変えてもらっても、ずっと中途半端さがついて回りました。給料をもらいながらボートをやらせてもらっているのに、一向に成果が挙がらない。会社は宣伝やイメージアップのためにボート部を運営しているのに、これでは意味がない、と。自分は給料泥棒か、とまで思い詰めました」と中野は打ち明ける。

日本のボート競技が世界に劣っているのは、大学卒業後も継続して同様の練習量が確保できる環境がないから。世界を知る中野は、「ボートは積み重ねのスポーツである」と実感していた。所属するNTT東日本チームも、全日本選手権で好成績を収めているだけでは物足りないはずだ。プロ野球やプロサッカーなどが盛んな日本で、ボートはマイナーなスポーツ。やはり所属選手がオリンピックで活躍し、「NTT東日本の中野紘志」とコールされてこそ意義がある。しかし、仕事をしながらの社会人選手が、世界で活躍することは極めて難しい。このジレンマに、中野は悩んだ。

「日本ボート協会も、いくら日本代表とはいえ、選手が所属する企業に対して年間の練習時間の確保を求めることなどできないという事情もあります。ならば自分で動くしかありません。会社を辞め、プロ選手としてオリンピックを目指す道を選ぶ決断をしました」

2015年10月、中野は退職願を提出する。しかし、生活の糧を得る当てはなかった。

「オリンピック選手に選ばれればスポンサーは見つかるはず、と信じるしかありませんでした」



そんな中野に救いの神が現れた。知人が、「茨城県が2019年の国体開催に向けて、同大会で活躍することを条件にスポーツ専門員という契約職員を募集している」と教えてくれた。そして中野は応募し、2016年2月、採用が決まる。それとともに、茨城県に本拠地を置く新日鐵住金のボート部に加入した。雇用とは無関係の、選手としての参加である。

「茨城県出身でもない自分が茨城県の艇庫を使わせてもらうのに、少しは縁があったほうがいいという思いで、同チームに加入させてもらいました」

契約職員としての給与がもらえるのは4月であるが、収入の当てができたことは大きかった。無所属の4か月間、無職となった中野は、ある日次のようなブログを書いている。

「『無職』って単純に職が無いことをいうものと思っていんだけど、けっこう周りから人もいなくなるし、自分からも声をかけづらくなるし、当たり前だけどお金もなくなるし、無職になって最初に得たものはたくさん不安でした。貯金残高という自分の戦闘力が減っていく虚しさ、(中略)スタバの店員さんに『お仕事帰りますか?』と聞かれて答えて窮する時間、その他いろんなことが、なってみないとわからない思い出として、なった」

「不安のおかげで、上手く漕げた時の喜びは半端なく嬉しいし、逆に結果が出なかったり怪我した時の落ち込み具合の半端なさに気付けたのも、会社を辞めてからでした」

「『一生懸命』は頑張ってるものじゃなくて立場でなるもんだなって、無職になって気付けた」

そのように、無職の中野はいろいろな感情を味わった。

「それまでよくご飯を食べていた人と食事をする時、気を遣うようになりました。相手は自分が無職であることを知っているわけですが、おこつてもらうのはプライドが許しませんでしたし、かといつて

1人で食べるのはさみしいし、という感じでしたね」

「一橋大学なのにもったいない」より 「中野紘志なのにもったいない」

そして、中野は一つの真実に気づく。ブログに、こう書き記している。

「『選択肢はたくさんあったほうがいい』と思い『一橋に入ったら何でもできる!』と思っただけで、いざ卒業してみると『一橋なんだから』という理由で超選択肢がないことに気づく。一橋っぽい進路に進むことはおそらく簡単だが、自分っぽい進路に進むことが異常に難しい。(中略)人生プラスマイナスゼロだと思う。いらぬものは全部捨ててしまえ。(中略)『一橋なのにもったいない』人生かもしれないけど『中野紘志なのにもったいない』人生はやだな」

「一橋大学を出たからには」という常識とも、中野は闘ったのだらう。そして中野は、日本人初のプロボート選手という職業を確立させようと、闘うことにしたのだ。

「ボートで世界に勝つには、そこまで突き詰めなければならぬ」という必然かもしれない。

しかし、プロスポーツの世界では「選手生命」は長くはない。その先はどう考えているのだろうか。

「引退後も、その時その時の目の前の課題に一生懸命取り組んでいけば拓けると思っています。実は、結婚を前提に交際している彼女がいます。もし彼女の両親に同じ質問をされたら、その論理じゃ弱すぎるのではないかと思っていることも事実です」と中野は苦笑する。しかしながら、常識的に考えて一橋大学を出てオリンピックに出場した人材を放っておくほど、この世界は人材が溢れ返ってはいないだろう。

リオ五輪日本代表に選出されて以降、中野はほかの選手とともに本大会に向けて合宿練習を繰り返している。中野とペアを組む大元英照選手は3歳上。その相手といかに呼吸を合わせられるかが勝負を分ける世界で、日頃、どういっ



たことを心がけているのだろうか。

「毎日一緒に練習するわけですが、いい雰囲気を持続することには気を遣っています。本当に言わなければいけない時以外は、相手に注文しないようにするとか。間違っても他責的な言い合いなどしてはいけません」と思っています。

そんな中野ら日本代表チームのコーチとして、フランス人のギザビエ・ドルフマン氏が招聘されている。シドニー五輪における軽量級舵手なしフォアのアメダリストだ。「日本の選手諸君は、真正面から実に真剣に取り組んでいる。きつという成果に結びつく」とコメントしている。選手たちとは、お互いに片言の英語でコミュニケーションしているという。

「専門用語は決まっていますから、十分コミュニケーションは取れています。お互い片言なので、かえって丁寧になっていいですね(笑)。ギザビエさんの考える練習方法は、量とか根性などというもののよりも、漕ぐ一本一本の質にこだわるといっても合理的なもの。選手として納得して取り組んでいます」と中野は言う。

本当にすごいのは オリンピックをつくった人

日の丸を背負って戦うプレッシャーは?という問いには「特に感じていない」と答える中野。

「19歳で始めて、苦しくても諦めずに続ければ、こういう立場に立てることもある。そんなことを示せた意義はあるとは自負しています。それもこれも、ボートのおかげです。自信が持てずに自責することが多かった自分を救ってくれ、前向きに生きられるようにしてくれたのは、ボート競技でありボート界です。そんな自分がオリンピックで頑張っている姿を見せることで、昔の自分のような人が1人でも前向きになれば、そして1人でも多くの日本人がボートを知ってくれればいいと思っています」

そう抱負を語る中野は、2016年5月1日のブログに次のように記している。

「大企業に就職した、すごいね。テレビ局に就職した、すごいね。確かにすごいけど、その企業つくった人の方がよっぽどすごい。そんな感じ。『オリンピックに行くなんてすごいね』って言われて、確かに嬉しい。人の気持ちを動かせた、久しぶりに俺仕事したんだな! さすが元無職!! って感じがすごいし、とても嬉しい。でも、本当にすごいのはそのオリンピックをつくった人だ。一番を目指すという、パイの取り合い能力を高めるとともに舞台をつくるという、パイをでかくする能力も高めないと仕事にならない。2016年のオリンピックっていうものを構成する一部として、ちゃんと働けるように、そしてそのノウハウをちょっとでも感じれるように、がんばりたいと思う」



中野紘志 (なかの・ひろし)

1987年生まれ。リオデジャネイロオリンピック日本代表選手(ボート)。2009年、一橋大学商学部在学中(端艇部所属)、チェコで開催された世界U23ボート選手権の男子軽量級舵手なしフォアで日本初の銀メダルを獲得した。2011年、商学部卒業後東日本電信電話株式会社(NTT東日本)に入社したが、2015年10月リオデジャネイロオリンピック出場を目指し、同社を退職。現在は、プロフェッショナル選手として茨城県スポーツ専門員を務める。新日鐵住金ボート部所属。

※取材は、2016年6月上旬に行いました。

一橋大学には、ユニークでエネルギーが豊富な女性が豊富と評判です。彼女たちがいかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを抱いているのか？第50回は、株式会社大塚家具代表取締役社長の大塚久美子さん（1991年、経済学部卒）です。聞き手は、商学研究科准教授の山下裕子です。

株式会社大塚家具
代表取締役社長

大塚久美子氏



Kumiko Otsuka

商学研究科准教授

山下裕子



Yuko Yamashita

仕立て直しの美学

住環境を整える7つの要素

山下 御社の有明本社ショールームが開設20周年を迎えられましたね。リニューアルオープンおめでとうございます。

大塚 ありがとうございます。あつという間の20年でした（笑）。今回のリニューアルオープンは、業界にとっても意味があることですし、今後大塚家具のエンジンとして運営していきたいと思っています。

山下 「幸せをレイアウトしよう。」を企業スローガンとされていますね。先日、大塚さん自ら講師をされた収納のセミナーでの、インテリアで暮らし方が変わる、というお話、大変印象的でした。参加者の方の多くが共感されていましたね。



大塚久美子（おおつか・くみこ）

1991年一橋大学経済学部卒業。同年株式会社富士銀行（現：株式会社みずほフィナンシャルグループ）入行。同行にて融資、国際広報を経て、1994年株式会社大塚家具に入社。1996年に取締役就任。経営企画室長、経理部長、営業管理部長、商品本部長等を務め、2004年取締役を退任。2005年IRコンサルティング会社、株式会社クオリア・コンサルティングを設立。2009年株式会社大塚家具創業40周年を機に同社代表取締役社長に就任。現在に至る。

大塚 教科書的な言い方になりますが、インテリアは人を主体として住空間に含まれる7つの要素・壁・天井・照明・家具・カーテン・アクセサリーが一体となったものです。ご存じのように、日本のライフスタイルの本格的な洋風化は、1980年代頃から始まりました。1980年代の後半になると新築マンションでは和室が少なくなり、台所がダイニングになり、応接間にあったソファァが生活する空間であるリビングに置かれるようになりました。本当の意味でインテリアへの関心が高まったのは、これ以降のことです。



山下 戦後の荒廃の中では、まず食が大事。それから衣。住は後回しになります。

大塚 一般的には、今でも家を買ってから家具を揃えますよね。モノとしてのインテリアが好き、この椅子がカッコいいというアプローチも、あり得ることだとは思いますが。でも、自分のライフスタイルに合った快適な環境を整えるという意味では、

7つの要素を一体として考えることが重要なのです。リニューアルオープンした有明本社ショールームでは、インテリアの7つの要素を意識したさまざまな組み合わせやレイアウトのアイデアを提案し、お客様がご自身にあった住生活を発見できる場にしたいと考えています。

山下 家財という言葉があるように、次はグレードの高い家具がほしい、と、自分の生活ではなく、高価な家具のほうに焦点を合わせてしまいう傾向がまだまだあるように思いますが、どうなのでしょう。

大塚 価値の高さというのは、希少なものと高価なものだけにあるとは限らないと思うのです。お客様のライフスタイルをほんの少しだけ豊かにする、少しだけ背伸びをして手が届く、そんな幸せをお届けしたいのです。その意味でも、家具を見る、選ぶというプロセスを楽しんでいたきたいと思っています。家具やインテリアは、人間関係に近いものがあると思うのです（笑）。友情や愛情は、人生を豊かにしてくれますよね。それと同じではないでしょうか。



低価格路線ではなく、 選択肢の幅を広げること

山下 今まであったものをつくり変えるというのは、勇気のいることですよね？

大塚 私は、店舗はつねに変え続けるべきものだと思います。たとえば、お客様が1年後に再び店舗に來られた時、同じものを見ても新鮮には思えません。ずっと変え続け、進化し続けたいと思っています。

もちろん、店づくりに試行錯誤はありますが、私自身迷うことはありません。でも、最終的に何を追求するかという軸はぶれていません。お客様の生活の質を高めるものであること、サステナブルなこと、そして企業として変化に耐えられる仕組みづくりです。大塚家具は、私の祖父が埼玉県春日部市で営んでいた桐たんす工房での製造直販から始まりました。職人さんたちは気持ちを込めていいものをつくっています。愛情を込めて取り組むという弊社の原点は、変わらないですね。

山下 大塚さんが社長になられて御社が低価格路線に舵を切られたという報道がなされていますが、それは間違っていますね。

大塚 はい。普及品から高級品まで幅広く扱うということは変わりません。お客様の選択肢の幅を



広げたいということなのです。食もそうですよね、ファストフードを食べることもあれば、高級レストランに行くこともある。私は、その間にある日常をちよつと幸せにしてくれる毎日の食事のような

ものを充実させたいと思っています。

山下 失礼ですが、大塚さんご自身についても偏った伝わり方になっている気がします。ポーカールフェイスで強い女というイメージが流布されているような気がします。

大塚 そうですね、顔には出ていなかったかもしれませんが、一連の報道がなされた時は、食事も睡眠もとれませんでした。当時はだいぶスリムになりましたね（笑）。

山下 さぞかし大変だろうと応援していましたが、それにしても顔に出ませんね（笑）。眠りといえば、

アリアナ・ハフィントンが、『睡眠革命』という本を出していますね。男性は、短時間睡眠を誇るマツチヨ競争に嵌っているけど、意思決定の質は確実に落ちる。女性は、眠ることでトップを目指すべきだと（笑）。

大塚 質の高い睡眠と安心できるパーソナル・スペースは大事ですね。自分の基準を取り戻せますから。

山下 「すべての女には密室が必要である。」塩野七生氏の格言ですが、極上の眠りの基地にしたい（笑）。男性にも必要ね。



IDC大塚家具 有明本社ショールームにて。収納等、機能性にすぐれ、そのコストパフォーマンスに一同驚いたソファベッドで

お客様と寄り添う、 プロフェッショナル・サービスの提供

山下 今後、特に力を入れていきたいのは、どのようなことですか？

大塚 日本のインテリアが成熟していく過程で、弊社としてやるべきこと、やることはたくさんあると考えています。その



大塚さん自ら考案された家具転倒防止器具「耐震アトラスネオ」。賃貸マンションでも手軽に設置できるうえ、震度7～6強相当に耐える強さがあり、壁や天井にもなじみやすく美しい。2013年度グッドデザイン賞を受賞

の二つがプロフェッショナル・サービスの提供です。今、ご自分の住空間に満足していない方は多いと思います。なんとなく不満だけれど、どうすれば満足できるのか、どう解決したらいいのかというところまでは考えていないかもしれません。食

や衣については、自分の価値観をはっきりと理解している。でも、住空間に関しては「自分が求めるのはこれだ」と明確に分らない方がまだ多いのではないのでしょうか。これまで選択肢が提示されてこなかったから、人々が住空間をつくる経験も少なかったのでしょうか。

山下 プロフェッショナル・サービスとは、具体的にどのようなものですか？

大塚 お客様が求めているものは何か、その「何か」をお客様に発見していただくためのプロセス



一橋の女性たち

対談を終えて

「クール・ビューティの笑顔」

大塚さんは理知的でいつも涼やか。特に昨年来の嵐の中での髪一本乱れぬ氷姫ぶり、皆、好奇心いっぱいではないでしょうか。一体、どうやって暮らしているの？

大塚さんの教え・その1、ライフステージが変われば暮らしも変わる。その2、暮らしを変えれば自分が変わる。最高級家具に囲まれた生活かと思ったら、軽やかに調度を変えていらっしゃるそう。大切なのは、自分がどう生きたいか、どう暮らしを変えたいか。しかし、誰もが明確に答えを分かっているわけではない。そこで、願いを形にする手伝いをしてくれる人が必要になる。

トーマス・カーライルの処女作は、『サター・リザータス』。「仕立て直された仕立て屋」という意味である。衣装を社会と見立て、着衣による人間の思考停止に警鐘を鳴らす内容だが、結論部分に、洒落者と貧奴の家具とを比較するくだりがある。洒落者は指南書に盲従し、貧奴は家具などに考えも至らない。思考停止の社会で、唯一、頭を使える立場にあるのは仕立て屋だ、という、一風変わった主張を展開するのである。その心は、お客に寄り添って考える仕立て屋こそ、表層と思考をつなげることができるから。後の「キャプテンズ・オブ・インダストリー」の思想源流といえるだろう。

大塚さんの取り組みは、仕立て屋の仕立て直しという一大事業なのではないだろうか。それは、社会的にも極めて重要だ。労働人口が減る中、暮らしの質は労働の質を決めるだろう。そして、顧客価値をクオリティに転換する産業の在り方にもつながってくる。何だか、大げさすぎるかな。

朝、何気なく「と姉ちゃん」に目をやると、企画会議を切り盛りする主人公の笑顔が飛び込んできた。収納家具Shinシリーズや地震対策器具等、自ら発案された新しい商品の数々を生き生きと説明してくださった姿を思い出す。公的な場面でのクールなお顔の背後の、好奇心に満ち溢れたピュアな笑顔。ああ、これが、仕立て直しの原点であった！

東京湾を臨む有明のショールームは、明るく開放的で、新しい暮らしを開いてくれそうな予感にワクワク。足を運ばれたら、クール・ビューティのお茶目な素顔に遭遇できるかもしれませんよ。（山下裕子）

にきちんと向き合って寄り添うことです。
山下 おお客様の求めているものを読み取るには、経験が必要そうですね。
大塚 ごくシンプルに言えば、雑談力と洞察力ですね。個人差はありますが、経験の少ない若い従業員でも、きちんとコミュニケーションをすればお客様の要求が見えてきます。雑談の中の何気ない一言から気づくことも多いですし、ちょっとした仕草を見て察することもできます。そのためには、お客様のことを本当に知りたいか、幸せになっただきたいか、と思っているか、その気持ちの部分が大切なのです。もちろん、プロとして専門知識



新発想のユニット収納シリーズ“Shin”。こちらは大塚さん肝入りの力作で、4200ものパーツを組み合わせてライフスタイルにぴったりの収納をつくることができる。本格的な素材と作りなのに、驚くほどリーズナブルな価格で吃驚。衣類用に棚の引き出しもあり、筆筒屋さんの伝統がふんわり香りました

があるのは大前提です。インテリア・コーディネーターの資格だけでも130人が持っておりますし、今まさにショールームで「眠り」をテーマにしていますが、スタッフの約9割はスリープ・アドバイザーの資格を持っています。知識に裏付けられたアドバイスを通して、お客様の住空間の満足度アップを実現していきたいと思っています。
また、接客から得たものを集約し、活用する仕組みづくりも重要だと考えています。

山下 大塚さんの改革、日本の社会にとっても、大変重要だと思います。頑張っ



家具の仕立て直しや、思い出のファブリックを用いてのランプシェード製作等、思い出の品を今に活かす活動を大事にされている大塚さん。同行させてもらった学生たちも大いに刺激を受けていました

るのです。
「資産」と言っているかもしれない。仕事は、答えのない問題の連続です。社会に出れば、どう問題をとらえ、考え、解決していくかが問われます。その時に、大学で得た「資産」が生きてくるのです。
後輩である学生へのメッセージをお願いします。
大塚 学生時代にはやりたいことがいろいろあると思いますが、やはり勉強したほうがいいと思います。知識ではなく「ものの考え方」を学べるのは、大学までです。学生だけが得

演劇の魅力

演劇との出会いは大学時代である。

高校時代アメリカへ1年間留学した。帰国後も英語を続けたかったので、東京大学に入学してESS (English Speaking Society) に入った。ESSはデイブート、ディスカッションなど幅広い活動をしていたが、当時、特にドラマ(演劇)に力を入れていた。毎年12月に開催されていた東京大学、国際基督教大学(ICU)、青山学院大学、東京外国語大学の4大学のコンテストで、東大は「ガラスの動物園」を演じて優勝した。私は足が不自由な娘の役を務め、ラッキーなことに主演女優賞を受賞したため、翌年演出を担当することになった。上演作品を決めるために多くの戯曲を読み、一時期は月に2、3回のペースでいろいろなジャンルの劇を観た。

Love of Culture

演劇の魅力



商学研究科教授

江川雅子

東大在学中だった演出家の野田秀樹は、「夢の遊眠社」の前身の「演劇研究会(劇研)」に所属して活動していた。私たちは劇研から照明器具を借りたり、練習メソッドを教わったりしていたので、お礼に300円のチケットを購入して、駒場寮の食堂で「怪盗乱魔」を

観たこともあった。

1970年代後半から80年代は小劇場・アンケラ劇がブームで、唐十郎(状況劇場・紅テント)や鈴木忠志(早稲田小劇場)の芝居、渋谷のジャン・ジャンにも通った。狭い空間にぎゅうぎゅう詰めに座り、舞台との一体感を味わえるのが醍醐味だ。一番前の席で、天井から水を撒く演出でびしょ濡れになったこともある。

他方、蜷川幸雄の演出も印象に残っている。舞台の奥にずらりと並んだ黒い衣装の役者が、声を揃えて長いセリフを喋る。古代ギリシア劇のコロス(合唱隊)を真似たもので、おどろおどろしい迫力があつた。

頻度は激減したが、大学卒業後も劇場に足を運んだ。仕事でニューヨークやロンドンに出張した際、当日券を買って開演直前に劇場に滑り込んだこともある。ブロードウェイで観た芝居では、「焼けたトタン屋根の上の猫」の主演キャスリーン・ターナーが素晴らしかった。

最近観た朗読劇「ラヴ・レターズ」では、言葉や声の持つ力を再認識した。2人の男女が椅子に腰かけたまま、数十年間にわたって交換した手紙を読み上げる。セリフだけで、2人の感情のつれ、起伏に富んだそれぞれの人生が鮮やかに描き出される。2人のライフストーリーがリアルに迫ってきて、心を揺さぶられた。

演劇の魅力は何と言っても舞台と観客の一体感である。毎日同じものを演じていても、その日の観客の反応や社会の状況に応じて内容が変わる。一期一会の魅力がある。

香川県琴平町のこんびら歌舞伎は、天保年間に建てられた芝居小屋を改修して、1985年から定期公演を復活させたものだ。畳敷きの桝席と舞台との距離が近く、役者が観客席に分け入って観客と当意即妙のやり取りをする。長い間打ち捨てられていた芝居小屋が蘇ったのは、歌舞伎役者が「ぜひこの舞台を踏みたい」と復活を熱望したのがきっかけだったという。一体感には役者にとっても魅力なのだ。

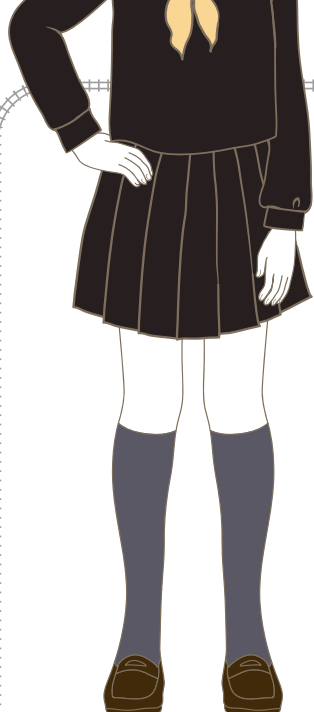
演劇の魅力は鑑賞だけにとどまらない。学生時代、大道具・小道具・照明などの裏方や役者を合わせ、30人ほどの仲間と一緒に舞台を作り上げた経験も、かけがえない。数か月間一つの目標に取り組んだ仲間とは今でも親しくしている。思い返せば、演出としてそのリーダーを務めたのが、私にとってマネジメントの初めての体験だった。数々の失敗を思い起こすと、彼女らには感謝しても足りない。

アマチュアとは言え、役者や演出の経験があるので、客席にいても舞台を作る側の事情も考えてしまう。演出家はこのような効果を狙って役者を配置しているのだろうか、照明の照度を落として緊張感を高めようとしているのだろうか分析している自分と、観客の1人として舞台に惹き込まれている自分とが混在している。

「世界」と「アイデンティティ」を問いかける、主客のインターアクションと混淆の感覚。古代から現代に至る演劇の魅力の源ではないか。

桜庭一樹 『少女七竈と七人の 可愛そうな大人』

(角川書店、2006年)



アメリカに長く住んでいる間、日本語の小説をほとんど読まなかった。久しぶりに帰国して、現代文学を読みたいと思ったのだけれど、何から読み始めていいのか分からない。そこでブッククラブに参加して出合ったのが、本書である。題名は誤植ではない。非常に美しい少女ナナカマドとちつとも可愛くない七人の大人の物語である。私にとってこの本は衝撃だった。アメリカでは、日本作家ですぐに翻訳が出るのはムラカミ・ハルキだけだったけれど、サクラバ・カズキもいずれ世界文学になると思った。

これからその理由を述べたいと思うのだが、まだ本書を読んでいない人には、以下の記述はこれから読む楽しみを奪ってしまうかもしれないことを、予めお断りする。

この本の魅力はセンチメンタリズムと知性とユーモアの絶妙な組み合わせにある、と思う。

表面上はたいへん抒情的な恋愛物語でありながら、その展開は論理的の上でない。経済学のゲーム理論に「共有知 (common knowledge)」という概念がある。普段の会話で「そんなことはみんな知っているよ」と簡単に言うけれど、共同体の中にある知識が共有さ

れているとはどういうことか、を厳密に定義するのは意外に難しい。たとえば「AもBも個人的にはそのことを知っているけれど、AもBもお互いがそのことを知っているかどうかは知らない」という状態は共有知とはほど遠い。そして、ある事実が共有知になるとならないのは、人々の行動に質的な変化があることが知られている。

主人公のナナカマドは地方小都市の未婚の母に生まれ、自分の父が誰なのかを知らない。母本人も(ここで説明するには長すぎる理由から)ナナカマドの父を確定できない。だから、物語の始まりでは、登場人物も読者も誰一人として真実を知らない。でも、ナナカマドが成長してどんどん美しくなるにつれて(ちなみに母は平凡な容姿を持つ)、登場人物はそれぞれ漠然とした推測を抱き始める。これを推測Aと呼ぼう。ところで、ナナカマドには幼なじみで心を通わせる美しい少年ユキカゼがいる。この推測Aがもし真実ならば、それはこの二人の関係を決定的に変えてしまう爆薬のような力を持つ。

ナナカマドは漠然とした不安を抱きながら、でもそうではないことを(また仮にそうだとしなくても誰もそれに気づかないことを)願っている。そして彼女の母もユキカゼの母も周囲の大人たちも、それぞれの胸に推測Aを抱きつつ、決してそれを口にするのではない。これは危ういけれど、一つの均衡である。何も起こらなければ維持されうる均衡である。

ところで、この物語は第一人称の語りによって進行し、その語り手が章ごとに変わる。読者に複数の視点を与えるために使われる手法だ

が、それが本書では絶大な効果を発揮する。序章は母、第1章はナナカマド、ここまでは普通なのだが、第2章ではナナカマドの家にやってきた犬が語り手となる。そして、犬は(人間にはない嗅覚で)いつも簡単に真実を嗅ぎ分け、それを読者の前でつぶやく。でも登場人物は犬語を理解しないので、その真実を知ることはい。だから、読者だけが早くに真実を知り、その後の物語の展開を手に汗握って読み進めることになる。そして章の進行につれて、推測は各人の胸中で少しずつ「確信」に変わり、それがついに事情を知らない第三者の発言によって「共有知」になる。その瞬間に均衡は壊れて、ナナカマドは大きな決断をする。これは共有知の概念がもたらす論理的帰結である。それはまた、ナナカマドが新しい世界へ一歩踏み出す瞬間でもある。

桜庭一樹は、この作品の後に長編『赤朽葉家の伝説』を書き、さらに『私の男』を書いて、ホップ・ステップ・ジャンプで直木賞を受賞することになった。しかも、彼女は変幻自在で一作ごとに作風が変わり、今も進化を続けている。創造性溢れる世界文学者の登場である。



一橋大学基金は、 グローバル人材育成事業を支援しています

現在、本学には、協定校への長期交換留学、世界トップレベル大学への長期留学、海外語学研修、短期海外研修などタイプの異なる多数の留学・海外研修プログラムがあり、年間約400名の学生が海外で学んでいます。ここでは、数あるプログラムの中から、スペインのBergé（ベルヘ）社で行う短期海外研修（スペイン企業派遣）をご紹介します。

研修実施のため本学がBergé社との覚書を締結した2008年以降、本学は毎年6名の学生を同社に派遣しています。同社での研修期間は5週間。その間学生たちは英語のみで就業を体験します。帰国後は、海外研修の体験記を発行し、Bergé社、本学学生及び関係者に学習成果を伝えます。

<http://international.hit-u.ac.jp/jp/courses/short-term/spain/>

研修にかかる学生参加費及び運営費の一部は、一橋大学基金から拠出されています。このように、本学では、皆様から頂戴したご寄付による一橋大学基金をグローバル人材育成のために有効に活用させていただいております。



大学教育研究開発センター・Mancuso准教授に英作文の指導を受けながらレポート集を作成する学生たち。
レポートは英語と日本語の両方で書かれる



Bergé社での研修体験記は、雑誌形式のレポート集として発行される

海外研修を終えて



経済学部4年
増野 甫さん

大学に入学する前から、将来は多文化の環境で仕事をしたいと考えていました。そしてこの研修を体験することで、その思いがさらに強くなりました。価値観や生活習慣が異なる人々から刺激を受け、自分の生き方の幅が広がっていくような感覚がありました。来年4月からはグローバル市場を相手にメーカーで働きます。(談)



法学部3年
松野素子さん

インターンシップでは法務部門に配属されました。英語のみで仕事をすることに最初は戸惑い、社員の方々との意思の疎通がうまくいきませんでした。しかしメンターの方にサポートしていただきながら、徐々に積極的に取り組めるようになりました。ここで得た貴重な体験を糧に、今年秋からは長期留学にチャレンジします。(談)



経済学部3年
溝渕達也さん

このインターンシップを通して、自分の強みと弱みを知ることができました。私は数字には強いという自負があり、その部分に対しては強いこだわりを持っていました。しかし仕事に求められるのはバランスです。多くの仕事がある中、優先順位を考えながら、今やるべきことをしっかりとやる。社員の方々の仕事ぶりから学びました。(談)

平成28年度一橋大学附属図書館企画展示のお知らせ

一橋大学附属図書館では、「一橋大学と東京外国語大学」と題する東京外国語大学との共同企画展示を開催します。明治から大正期までの両校の歩みについて、当館所蔵の資料をもとに紹介します。商法講習所を出発点とする一橋大学の歴史は決して平坦な道のりではありません。本展示では、当時の世間からの商業教育への無理解や固定観念を打ち破り、大学昇格へ向けて邁進してきた先人たちの努力、特に「海を越えた外国語教員」、「海外へ飛び立った卒業生」にスポットライトをあてます。

平成28年度一橋大学附属図書館企画展示 「一橋大学と東京外国語大学」



上條俊介《E.J. Blockhuys》一橋大学附属図書館所蔵
ブロックホイス（ベルギー出身、1862-1931）は、30年間東京商科大学で講師を務めた。



石河光哉《A.J. Hare》一橋大学附属図書館所蔵
ヘアー（イギリス出身、1847-1918）は、東京商業学校が東京商科大学に昇格する直前まで39年間勤め、英語教師、商業作文を担当した。

【 展 示 】 会 期：平成28年11月1日（火）～18日（金） 午前10時～午後5時 ※土・日、祝日は閉室
会 場：附属図書館展示室（時計台棟1階）

※ただし一橋祭期間中、11月4日（金）～6日（日）は午前9時半～午後5時開室

【講演（予定）】 講 演：倉方慶明氏（東京外国語大学文書館）
テーマ：「東京外国語大学から見た一橋大学」
日 時：平成28年11月18日（金） 午後2時半～4時
会 場：附属図書館会議室（時計台棟1階）

※展示・講演とも入場無料

内容・日程等に変更の生じる場合がありますが、その他詳細と併せ、
附属図書館ウェブサイト（<http://www.lib.hit-u.ac.jp/>）にて随時ご案内申し上げます。
《お問い合わせ先》 附属図書館研究開発室 電話042-580-8252

〈編集・発行〉
一橋大学HQ編集部

〈編集部長〉
理事・副学長（総務、財務、情報化担当） 佐藤 宏

〈編集長〉
商学研究科教授 鷲田祐一

〈編集委員〉
経済学研究科教授 塩路悦朗
法学研究科教授 小関武史
社会学研究科准教授 久保明教
言語社会研究科准教授 小泉順也
国際企業戦略研究科准教授 古賀健太郎
経済研究所准教授 宇南山 卓

〈外部編集委員〉
株式会社キーンコンセプト 吉田清純

〈印刷・製本〉
三浦印刷株式会社

〈お問い合わせ先〉
一橋大学総務部広報室広報係
〒186-8601 東京都国立市中2-1
Tel: 042-580-8032 Fax: 042-580-8889
<http://www.hit-u.ac.jp/>
koho1284@dm.hit-u.ac.jp

※ご意見をお寄せください。
一橋大学総務部広報室広報係
koho1284@dm.hit-u.ac.jp

※本誌掲載の文章・記事・写真等の無断転載はお断りします。

●広告掲載お問い合わせ先
一橋大学総務部広報室広報係
TEL: 042-580-8032

編集部から

2016年夏を盛り上げてくれたリオデジャネイロ五輪に、本号「People」に登場された中野紘志さん（2011年商学部卒）が出演されました。私にとっては自分が所属する大学の、それも最近のOBがこうした舞台に立たれるというのは初めてで、何やら自分まで晴れがましく感じるような体験でした。もう1人、現役一橋大生の荒川龍太さん（法学部4年）が、やはりボート競技（舵手なしフォア男子軽量級）で五輪出場をかけた世界最終予選に挑みました。荒川さんは横浜市出身ということで、神奈川新聞が2016年3月2日付で記事を載せています。それによると彼は大学入学まではボートとは無縁の生活を送っていたようです。入学後めきめきと頭角を現し、3年あまりで五輪にあと少しで手が届くところまで成長しました。一橋大学には、目覚めれば世界に伍して戦っていける逸材が眠っているのでしょうね。私たち教員もスポーツに限らず各分野で、荒川さんに続く人材の発掘を少しでも手助けできればと願っています。（塩路）

2016オープンキャンパスを開催しました

7月31日（日）に高校生等を対象としたオープンキャンパスを開催しました。一橋大学に関心を持つ約8,400人の方々が参加しました。

今年から、より多くの方が希望する学部の説明会に参加することができるように、学部説明会を従来の3回から4回へ増やして実施しました。高校生たちは希望する学部の説明会場で、学部長の挨拶や模擬講義、学生によるパネル討論などに参加しました。



挨拶する蓼沼学長

兼松講堂で行われた大学紹介では、蓼沼宏一学長から挨拶があり、次に沼上幹理事・副学長から一橋大学の教育の伝統と留学制度、来年度から始まる新学学期制についての説明がありました。

その他にも、図書館見学や学生生活相談コーナー、学生によるキャンパスツアーや受験生相談会等の企画も行われ、参加者は猛暑に負けず熱心に聴き入っており、終始盛況のうちに終了することができました。

これらの模様については、本学ウェブサイトにて配信する予定です。

《一橋大学オープンキャンパスウェブサイト》

<http://www.hit-u.ac.jp/admission/opencampus/>



大学紹介の映像を上映したインテリジェントホールの様子



学生による受験相談会

◆追悼

2016年2月20日、元ファミリーマート代表取締役社長の沖正一郎氏が89歳で亡くられました。沖氏は1951年に東京商科大学（のちの一橋大学）を卒業後、伊藤忠商事に入社。香港駐在や西友ストア常務等を経て、1981年には初代ファミリーマート社長に就任。実業界での活躍の一方、鼻煙壺（びえんこ）の収集家としても有名な方でした。

鼻煙壺とは、清朝時代の中国で流行していた嗅ぎタバコの粉末を入れる小さな容器のことで、美術品としての価値も高いことで知られています。沖氏のコレクションは、これまでにパリのギメ東洋美術館、北京の故宫博物院、大阪市立東洋陶磁美術館、世田谷美術館等に寄贈され、各地で常設展及び特別展が開催されてきました。

生前、沖氏のご厚意により、その貴重なコレクションから44点が本学に寄贈され、学内に展示されています。一つひとつが全く趣の異なる鼻煙壺。その奥深さに魅せられます。故人のご功績を偲び、心からご冥福をお祈りいたします。



一橋大学兼松講堂レジデントオーケストラ 国立シンフォニカー

第13回定期演奏会 *Kunitachi Symphoniker*

ペルチャッハで息づく深い想い
待望の宮城のブラームス!

ヨハネス ブラームス
J.BRAHMS

交響曲第1番ハ短調 作品68
Symphony No.1 IN C-MINOR, Op.68

交響曲第2番ニ長調 作品73
Symphony No.2 IN D-MAJOR, Op.73

指揮
宮城敬雄
Yuki Miyagi

2016年12月11日(日) 14:00開演 [13:15開場] 終演予定16:15 一橋大学兼松講堂

料金(税込):P席(プレミア) 4,000円 / S席 2,500円 好評発売中:2016年7月7日より

主催:一般社団法人 日欧芸術文化振興会 後援:一橋大学、一般社団法人 如水会、高輪プリンセスガルテン
協賛:株式会社立飛ホールディングス、多摩中央産業株式会社、日野自動車株式会社、松井証券株式会社

※未就学児童のご入場はご遠慮ください。
※兼松講堂は車椅子専用席は設けてありません。
悪しからずご了承ください。

JR国立駅南口より徒歩7分

販売窓口

03-3443-1524 (10:00~18:00 / 日・月曜定休) 高輪プリンセスガルテン内 日欧芸術文化振興会事務局

※事務局へお申込みの方は、下記口座までお申込日より1週間以内にチケット代金をお振り込みください。 ※手数料はご負担ください。ご入金確認次第、チケットを郵送いたします。

■三菱東京UFJ銀行 三田支店(店番 653)(普) 0028127 名義:一般社団法人 日欧芸術文化振興会

プレイガイド

■チケットぴあ 0570-02-9999

■電子チケットぴあ <http://t.pia.jp/> (Pコード:302-213)

■国立市内の取扱店:洋菓子・喫茶「白十字」南口店 042-572-0416

※予告なしに曲目、出演者等が変更となる場合があります。これに伴うチケットの払戻しは、いたしかねますのでなにとぞご了承ください。

一橋大学広報誌「HQ」第52号 ウェブアンケートご協力をお願い

「HQ」に関するみなさまのご意見・ご感想を、広報誌をよりよくするための貴重な資料として参考にさせていただきます。ウェブアンケート調査にご協力くださいますようお願いいたします。なお、アンケートにご協力いただいた方のなかから抽選で5名様に、素敵な商品をプレゼントいたします。

◆アンケート回答期限:2016年12月31日(土) 24:00まで

◆プレゼント内容:アンケートにご協力いただいた方のなかから抽選で5名様に、

書籍『ヨーロッパ 時空の交差点』をプレゼント

(一橋大学経済学研究科教授 大月康弘著、創文社、2015年)

※プレゼント当選者の発表は、賞品の発送をもって代えさせていただきます。

※ご提供いただいた個人情報は、プレゼント当選者への発送のみに使用します。

<http://www.hit-u.ac.jp/hq/enquete.html>

一橋大学 HQ

